
雨男ときどき晴れ

spice

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨男ときどき晴れ

【Nコード】

N4780W

【作者名】

spice

【あらすじ】

普通の学校に通っている（はずの）幹 時雨は、周りから”雨男”と呼ばれていた。

幼馴染の”晴女”こと佐久 晴花とは、なぜか成り行きで恋人に…

…！？

人を投げ飛ばす切れ者もいれば、超売れっ子の有名人、はたまたなりふり構わず暴れまわる恐ろしい先輩……。

”晴”どころ

か、落ち着ける場所すらも、”雨男”には与えられないのだった。

流されるがままの主人公を、温かく見守ってや
ってください。

人物紹介（前書き）

ほぼ自分用に作った紹介文です。
もし本編で間違いを見つけたら報告お願いします。

人物紹介

幹 みき 時雨 しぐれ 高校1年

林高校に通う、“雨男”な高校生。一年二組。
晴花とは幼馴染。

書道部に所属している・・・らしい。

一人称は俺。

それぞれのキャラを、晴花、ライタ、鴻上、日下、森山先輩、野原、と呼ぶ。

佐久 さく 晴花 はるか 高校1年

クラスは一組と、時雨とは違うのに、いつも休み時間に時雨のもとにやってくる。

推測では“晴女”とされている。

時雨とは幼馴染。

部活だけは、時雨と違い、手芸部。

一人称は私。

それぞれのキャラを、時雨、ライタくん、やくもくん、つくねちゃん、森山さん、雪菜さん、と呼ぶ。

金剛寺 こんごうじ ライタ 高校1年

オランダ人と日本人のハーフ。

時雨と同じクラスで、仲間意識が高い。

黄色の瞳で、栗毛の短髪。

バレー部に所属。

物事ははっきりと言うタイプ。

一人称はオレ。

それぞれのキャラを、しぐれ、佐久、やくも、つくねさん、あらし、野原、と呼ぶ。

鴻上こうがみ

八雲やくも

高校1年

一人称は僕。

それぞれのキャラを、幹くん、佐久さん、金剛寺くん、日下さん、森山さん、ゆきさん、と呼ぶ。

日下くさか

月音つくね

高校1年

一年四組。背中まで伸ばした黒髪に、前髪パツツン。

とあるきっかけで、ライタの家に居候することになった。

ライタがかつて言った、「運命」に従い（！？）、ライタを”殿”と呼び慕う。

一人称は私。

それぞれのキャラを、時雨さん、晴花さん、殿、八雲さん、と呼ぶ。

もりやま
森山 あらし 高校2年

一人称はあたし。

それぞれのキャラを、しぐ、ハル、ライタ、やつくん、つつきー、
ゆきちゃん、と呼ぶ。

のらはら
野原 ゆきな
雪菜 高校1年

一人称は私。

それぞれのキャラを、時雨くん、晴花さん、ライタくん、八雲くん、
月音さん、あらしさん、と呼ぶ。

人物紹介（後書き）

まだ増えると思います。

入学式の日、雨

四月某日、それは雨の激しい日のこと。彼らにとっては、林高校の入学式だった。

式は林高校第一体育館で行われた。紅白の横断幕に囲まれた体育館の内部は、ぎこちない制服を着た初々しい一年生と、カメラを持って我が子を捉えんとする父母の方々であふれている。教師たちは慣れてはいるものの、やはり苦笑いを浮かべている。

一年二組担任・相良は、そんな保護者をよそに、順に生徒の名を呼んでいく。

「……^{みき}幹^{しぐれ} 時雨」
「はい」

その声は小さいながら、微かに場内に余韻を残した。その余韻に、皆静まりかえり、その中で聞こえたのは外に響く雨音のみであった。事は、それからちょうど一か月後に始まる。

(1) くやはり雨く

窓を見やると、雨がしとしとと降っている。今日は朝から降っていて、レインコートを着て学校に来了。若干ワイシャツが濡れていたものの、1時限目が始まるころには乾いた。

この雨も、夕方には止むらしい。

俺は、初対面の人と会話するとき、事前に第一印象を確かめておく。例えば、出席番号1番の相田という男。初日から声を上げて担任の相良を困らせていた。

ほかに、自己紹介で笑いをおこしたり、積極的にクラスメイトに声をかけたりと、自己主張性の高いやつだった。簡単に言えば、「クラスに必ず一人二人いるムードメーカー」といったところか。こういうやつと仲良くなっていれば、まず孤立はしないだろう。

俺はほとんど感情を表に出さない。というかこの思惑だって、誰にも気づかれないようにしている。誰にも知られたくない。目立ちたくない。そのくせ、孤独を恐れる。

俺はきつと都合のいい人間と思われるだろうな。

今日は……いや、今日も雨が降っていた。”今日も”と言い換えたのは、俺があまりにも雨と関係が深いからだ。

周りから、よく雨男あめおとこと呼ばれていた。といっても、毎度毎度雨が降るなんて非科学的なことではない。ただ、特別な行事（修学旅行など）の日には必ずと言っていいほど雨が降るのだ（実際、旅行先で晴天の空を見たことはない）。この約16年の人生の経験から俺が一つ言えることは……

「俺が一つ言えることは……何？」

「俺のノートを手元に覗き見るな」

俺のノートを覗き見た人物は、同じクラスの生徒ではない。

一年一組の佐久さく 晴花はるかは、俺にとって、少し苦手な相手だった。

幼稚園時代からずっと同じ学校に通う幼馴染、と言えはなんと素敵な響きになるだろう。

こんな言葉で彼女を表現してしまえば、まるで俺と彼女が相性抜群というような感じを受けてしまうかもしれないし。

「ねえ、何なの？ 一つ言えることって」

「俺は完成途中の作品を見られるのが一番嫌いなんだ。だから言わない」

「作品って……！ そんな小学生みたいな日記引っさげて作品って……！！」

晴花は笑いを抑えつつ、俺の机をばんばん叩く。

彼女の言う”小学生みたいな”日記は、俺にとっては人生で一度しか無い日々を綴っている大事な代物であって、そんなこと言われる筋合いはさらさら無い。

先ほども言ったように、彼女は俺にとっては嫌な存在だ。俺と対照的に性格は明るく、物事を短絡的に捉えていて、友好関係なんて勝手につくれると思っている。現実にはもっと複雑かつ混沌に満ちているのに。

「それより、何で休み時間になると俺のクラスに現れるんだ」

「……まあ、いいじゃん。私がこの学校でまともに話せるの、時雨だけだし」

不覚だ。この言葉に一瞬でも心が揺らいだ自分が恨めしい。俺だけとはどういうことだ。

クラスが一緒になったことは、小学校の時から一度もないが、俺のいるクラスに頻繁に遊びに来て、俺に何か話題を吹っかけては、チャイムが鳴ると同時に立ち去っていく。まだ俺は話題に乗れていなかったにも関わらず。

一度、中学二年のころ、晴花は俺のことが好きなんじゃないかなど考えた時もあったが、俺が見ている限りで、彼女がそんな素振りや言動は全くなかった。

俺が自意識過剰であるか、もしくは俺の観察力が鈍っているのか……。どちらにせよ、俺は俺の作品を馬鹿にする彼女を好きになつたりはしない。たぶん。おそらく。七割くらい……。

とにかく、その小学生みたいな日記の続きが気になるんだけど」そう、そうだ。この女は、俺の心が一瞬揺らいだ隙に作品の完成形を垣間見ようとしていたんだ。

俺より頭悪いのに、こういう時は冴えていやがる。いや、俺と同じくらい……。あれ、俺より頭良かったっけ。そんなことは……ないな、うん。

「気にするな。これを馬鹿にするお前は、続きを気にしなくても生きていける」

「ひどいな、時雨。雨男って心までずさんでるのね」

俺を挑発しているのか、甘いな。

「お前が物事の真意を見ようとしなただけだ」

「じゃあ、真意って何なのよ」

「言葉で表したらそこで終わりだろうが」

よし、これは効いたみたいだ。なかなか反撃できまい。

「うるさい！ さつさと教えなさい、ダサメガネ！」

”うるさい”の4文字で片づけただけでなく、ダサメガネまで追加してきたか！

「俺のことはいい。だがこのメガネを侮辱することは許さん！ 設計者に謝れ！」

さすがに正気を保ってられない。この眼鏡はいつも忙しい父が、誕生日に俺のために選んでくれた大切なものだ。似合っているが、いまいが関係ない。まあ、視力は良い方なので、たまにしか使わない伊達眼鏡なのだが。

「設計者なんてここにはいないでしょ」

くっ、やられた。完全に晴花のペースだ。

「俺は……!!」

言いかけて、授業開始のチャイムが鳴った。我に返った時には、晴花はすでに教室から出ていた。

勝ったのか、負けたのか。晴花とのけんかはいつも曖昧なまま第三者によって終わられる。

そして、次の休み時間には、

「そういうわけで、日記の続きを見せて」

どういっわけでもなく、何事も無かったかのように俺のクラスに入ってくる。

(2) 雷落ちますか。」

さつき書きかけた、約16年の経験から俺が言えることについてそれは、俺の周りに降る雨が、その日の自分の気持ちの強さに比例することである。

気持ちの強さは、喜怒哀楽すべてで実証済みだ。例を挙げると、高校入試で合格した日、ひどい豪雨になった。小学生の時、友達とけんかして、学校の帰り道、台風に襲われた。可愛がっていた亀が死んだ時も、涙と雨粒で顔がくしゃくしゃになりながら、土に埋めてあげた。休みの日、無計画でサイクリングに出かけたら、暴風雨で飛んだ木の枝に引っかけた。自転車がパンクし、家まで何時間もかけて帰った。

このように、(思い込みかもしれないが)俺が雨男であることは明確に分かって頂けたと思う。

「へえ」。確かに、合格発表の時は雨途中からひどくなつたね」
「うわ、いつの間に」

と言いながら、俺はあまり驚いていなかった。書いている途中でもう気づいていたが、反応するのが癪で。

「私がこのクラスにいることに、もう何も違和感無くなつたでしょ」

”自分で言っちゃいかんだろ”この言葉は、声に出して言えていただろうか。心の内だけで呟いていただけだろうか。

「それよりさ、時雨は……クラスメイトと仲良くなつた？」

「なぜ間を置いた」

「いや、なんか、馴染めてないっぽいな」と

「さあな。それよりも、また俺の作品を覗きやがって」

「……覗くって、やらしい響き」

「はあ!？」

つい声を荒げてしまった。うむ、今度から「盗み見る」に変えよう。あまり変わっていないか。

「盗み見るってのもねえ……いやな感じしかないもん」

「お前が変態なだけだ。俺は全くそんな気は……ってお前また”心”読んだな」

「今回は読んでないよ。でも、あんなことやこんなことは読んだかも」

あんなこと、こんなことって何だ?とても気になる発言だな。まさか、あれや、これのことか!?

「三分の二くらい合ってるよ。あ、また読んじやった」

「や、やめてくれないか」

さすがに耐えられん。この女を嫌いな理由の一つだからな。

「もう読まないから、ね? 言いたいことは、はっきり言うべきよ」
「何を言うって?」

「私のことが嫌いなんですよ?言っちゃいなさいよ」

「俺が言うまでもなく言ってくれたじゃないか」

このとき、少し心が痛んだのは気のせいだ。晴花が嫌いというのがばれるのは、俺の良心が痛むということか。それとも本当は……

「俺はお前のことが好きなのかもしれないな」

急に、そんな言葉が俺の口から飛び出てきたのには、俺と晴花、両方が驚いた。

「えっ……はあああ!？」

これも気のせいだ、晴花の顔が赤く見える。晴花も予想していなかったということは、無心で言葉が出ることもあるのか。

「ちょ……ちょっと待て。な、何でそうなるんだ!？」

「知らないわよ! 時雨の口から出た言葉なんだから!」

というやりとりをしているから、夫婦漫才とか言われるんだろうな。今回は……、今回も”チャイム”に救われた。いろんな意味で。いつの間にか、雨は止み、外は雲が引いて太陽が照っている。

こんなことが、五月上旬の時点で起きたのだ。俺が自然に晴花のことが気になり始めるのは、きっとそう遠くないはずだ。事実、次の日から三日ほど、授業を受けた記憶はない。代わりに、休み時間に何事もなくやってくる晴花のことばかりしつかり記憶に残っている。あと覚えているのは、数学の豆テストが10点満点中、0点だったことぐらいか。

ふいに飛び出した言葉から、人を好きになるってあるのか……。いやいや、俺はやはり彼女のことが嫌いであった。好きなところは一つも出ない。逆に、嫌いなところはたくさん出てくる。

1週間後には、晴花のことを気にすることは無くなった。ようやくおかしな迷宮から抜け出すことに成功したのだ。

……まあ、それはあいつのおかげでもあるんだが。

〃

日記に書かなければならないこと、それは、晴花の能力のことである。

ちよつと心に隙間を作ると、晴花の力によつて、思っていることを読まれてしまう。人は不思議な力だと言うが、昔から被害を受けている俺にとっては、はた迷惑な話だ。

晴花に心を読まれまい、と思つて過ごしていたから、雨ばかり見るようになったのかな。少しくらい、読まれてもいいだろう。そう思つてこの10年、生きてきた。でも、俺の性分は、やはり変わらずであつた。

〃

話は戻つて、1週間後のあいつの話しよう。

(3) 雷落ちましたね。 〃

〃
俺は未だに晴花のことが気になっている。

なぜか、ここ数日晴れの日が続いている。前述した”気持ちの強さ”理論はこの件ではつきりと崩れてしまったのか。いいや、例外というものが存在するはずだ。例えば、”雨男”ならぬ”晴男”が俺の周りで暗躍しているとか。とすれば、近くにいる晴花が一番怪しい。じゃあ、晴れ女か？

〃

「……なぜに女に”？”を付けるかつ」

俺の頭に晴花の平手が当たる。

「痛っ、また見やがったな」

「ふむ、”覗き”や”盗み見”とは言わなくなったな。これからも精進したまえ」

「何様口調だ」

何を精進せよと？ ……というか、一行目のことには触れないのか？ 気づいていないのか？

「本当に見ないでくれよ。見られたくないことも書くことだってあるし」

「その辺は安心しなさい。どっちみち心で読んでるから」

「なっ……」

何だと。俺の心を読んだうえでその言動？ 一体どういう意味だ？ 駄目だ、言葉が一切浮かばない。

「…どうしたのよ、急に」

「俺の心読んだんだろ……」

そうだけど、と言う晴花の表情は不思議そうな顔をしている。

「だったら、ここ数日の俺がおかしいのも……」

「うん、分かってるよ」

だったら……。それは声には出なかった。その時だった。

「どおりやああああ……!!」

突然大声が聞こえた。直後に轟音が響く。廊下の方からか。

廊下に出ると、そこには何かが擦った跡があり、壁にうずくまる生徒と、その対称に位置する生徒がいた。

「はあ……」

理解できたのは、一人が一人を向こう側に飛ばしたことだ。……

えっ？ 飛ばした!？

「ふざけんなよ!」

飛ばした、と思われる生徒が叫んだ。

「オレはともかく、このイズマを馬鹿にするのは許せねえ!」

はっ？ いずま？ 何のことを言っているのかよく分からない。

「こいつは、毎日大事に育ててきた、オレの家族なんだ!!」

……お、おう。よくまあ、そんな気恥ずかしい台詞を言えた

もんだ。大事に育ててきた家族って……誰？

「それを……メダカだと……!？ こいつはメダカじゃなくグツピ
ーなんだよ!!」

違いがよく分かりませんが。すみません。

俺が考えていることは、その生徒には伝わっていないと思う。……

よく見たら、うちのクラスのやつじゃないか？

「謝れ! オレの大事なイズマに謝れ!」

おそらく壁にぶつけられた生徒には聞こえていないのに、そのクラスメイトは叫び続ける。

いや、壁の方まで近づいて、相手の襟を掴んで……ってまたやるつもりか!？

「さすがに、まずいよな……」

横で見ていた2、3人が呟いた。うん、まずいよな。
俺はそんな思いから……

「いい加減にしようか」

「ああ？ 関係ねえのは黙って見てろ！！」

「……黙って見てられないから止めに来たんだよ」
と、そこで俺の拳が唸る。彼は同じ壁に違う傷をつける。

……ということをお願いした。思いついたただけだった。実際漫画みたいなことをしようとすると、後のことが大変そうだとか、まず俺のパンチは効くのか！？ とか考えて、動けはしないんだな……。他に誰かやってくれないかな、と思っていると、

「何してるんだー！！」

よし来た！！……と思ったら先生だった、という結末になります。

彼は教師にしっかりと説教され、壁の修理代を払って、停学処分にもなるのかな。教師にしっかりと説教されるところまでは合っていた。しかし、その後の展開は、予想もつかないことになってしまった。

「君も関係者かい？」

突然こつちに声が向いた。本気で誰のことを言っているのか分からないかった。

「君のことだよ、おーい」

妙に胸騒ぎがした。……え？ 俺？ 何で？ 気が付けば、俺は壁のすぐそばにいるではないか。なるほど、俺か。

「え、ええええええ！！」

初めてこんな声出したなあ。

そっいうわけで、彼らと共に、俺は校長室に行くことになったの

であつた。

(4) 衝撃

校長室つて、どんな雰囲気だろうか。小学校の校長室には、6年生の時、清掃区域として入ったことがあるが、それ以外は全く関わる事が無かった。大体は相当悪いことしないと入れない部屋なのだと思うていた(そんなことは無いだろうけど)。

「歩きながらも、日記書くのね」

やはり見られていたか。というより、なぜ晴花はついてきた。そして、なぜ俺は無意識にペンを動かしているうえに、晴花にそれを見られていても気にしなくなっている!?

何か、日頃思いつめすぎているのだろうか。今は、校長室で何を言われるかがとても心配だ。心配です。心配でございま候。

「日記を書くのは俺の勝手だろ」

無意識に書いていたけど。

「それは、そうだけど」

それから校長室に着くまで、晴花は一言も話さなくなった。

そして、それを少し寂しく思ってしまう俺。どうしたんだ、一体。

”校長室”という看板がかかった部屋の前に着くと、思ったよりその廊下は騒がしかった。

といつても、事件の噂を聞いた野次馬が集まっていただけで、いつもはもっと静寂なのだろう。教師たちが「静かにしろ」と言ったところで、この群衆は静まらないだろう。

このとき、

「黙れ、がやがやとうるせえんだよ」

と傍で静かな怒りが響いた。乱暴ながら、その言葉は群衆を押し

た。俺もこんなこと言えないかなあ。

「無理無理、時雨にはできないって」

反対側から囁く晴花の声がした。ちくしょう、また俺の心を読んだな。できないなんて言うなよ、いつかやってやるさ。後が怖いけど。

「うんうん、そういう冷静さが、時雨の良いところでも悪いところでもあるのよね」

「……それは慰められたと思っていいのか？」

先に教師1人が、失礼します、と部屋に入った。続けて、謎の生徒（今はこう言っておく）、俺、そしてなぜか来た晴花、もう1人の教師の順に校長室に入る。

前には、機能性の（ついでに値段も）高そうな横長の机、その椅子に座る人がいた。その方こそ、我が”県立林高等学校”の学校長、飯盛校長であつた。

名前の方は……覚えていない。確か、セイキチだったか、シヨウキチだったか……。

「こういう形で生徒と話すのは、十年ぶり位ですな」

「飯盛校長。冗談はお控え願います」

見るからに硬そうなその教師は、眼鏡に七三分けという、古風なスタイルだった。一組担任の、杉田先生だっけ。数学を教えていたような……。

何だかんだで、1か月経っても教師の顔と名前が一致しない。クラスメイトの名前は覚えたが、顔までは覚えられない。だからいつまでも謎の生徒の名前を思い出せないのだ。

「これは失礼」

一つ咳払いをして、飯盛校長は話し始めた。

「今回の件、教師たちから話は聞きました。数日前から、クラスの何人かにからかわれていたと」

そんな話だったのか。同じクラスなのに全く気付かなかった。晴花との会話ばかりで。

「そして今日、飼っている魚にまで悪口を言われ……、生徒一人を投げ飛ばしたのですか」

「申し訳ありませんでした」

そう言つて謎の生徒は頭を下げた。後悔はしているのだろう。

「校長、いかがなさいますか」

飯盛校長は、しばらく顔をしかめていた。が、急に笑顔になつて、
「天晴れ！ 素晴らしい暴拳に出ましたな！」

「は！？」

校長以外、皆があつけにとられた。

「飯盛校長！ 一体何をおっしゃつて……」

「好いではありませんか。自分とはかく、他人を侮辱することを許さない。そういう考え方が、現代の日本人には欠けているのです」
「そうは言つても……」

「もちろん、処分はきつちりさせてもらいます。ですが、相手側に非があるのも事実。……ここは、喧嘩両成敗ということで、1週間の停学処分とさせていただきます」

「なっ……」

さすがの杉田先生も、言葉を失つたようだ。暴拳に出ているのは校長の方では？ とはまさか言えまい。

謎の生徒の方は、嬉しそうな表情を必死にこらえているように見える。

「えっと……私たちの方は、どうなるんでしょうか……？」

すっかり忘れていた。俺まで停学になるんじゃないだろうな？？

「この2人は？」

「近くにいた生徒です。事情を詳しく聞くものと思い、この2人も呼んだのですが……」

呆然としている杉田先生に代わつて、もう一人の教師が説明した。
この人は、見たことあるんだけど何も思い出せないな。

「では、処分は無しで問題ありません。ただ、今後のことも考えて、クラス全体で話し合う場を設けた方が良いでしょう」

何よりも先に安心した。俺もなかなかの小心者だな。

「杉田先生。学年主任として、他のクラス担任にもこのことをお伝え願います」

「……はっ。はい、分かりました」

やっと我に返りましたか。話は聞こえていたのかは疑問だが。

飯盛校長が、この学校に長くいることが窺^{うかが}える。彼の采配には、微塵の隙もない。加害者の思いをくみ取りながらも、被害者への配慮も忘れていない。

彼が座っている奥に、2枚の額が飾ってある。

縦長の書道用紙に、1枚は、

”何度倒れても、立ち上がることを忘れるな”

と書いてある。なめらかな筆運びと共に、文字の力強さが見て取れる。

もう1枚は、

”満身創痍^{まんしんそうい}も、生きた証”

とある。”満身創痍”は、簡潔に言えば”全身傷だらけ”といった意味だろうか。

『たとえ体中が傷だらけでも、生きることを諦めるな』

そんな思いが伝わってくる。特に、”証”という字が、強く印象に残る。

この2枚、どちらも雰囲気似ているから、同じ人が書いたのか。もしや、飯盛校長がこれを……！？

その時、何かと何か繋がった。

「飯盛……双玄……」

隣の晴花が、不思議そうに俺を見つめている気がした。

(5) 雷雨は去ったものの、

飯盛^{いいもり} 双玄^{そうげん}。この名前なら、知っている。三年前、名前以外・秘^ひ匿^{とく}で話題になった、天才書道家だ。もちろん、”双玄”というのも本名ではないのだろう。3年前というと、俺がまだ12、3歳の頃だ。

あの人のおかげで、俺は今ここにいるんだ。

結局、謎の生徒と、彼をからかっていた生徒3人は停学1週間ということで話はついた。校長室を出るとき、今度は、謎の生徒、教師2人、晴花、俺の順に出た。

俺は部屋を出る直前、

「飯盛先生」

と呼んだ。その時言った”先生”は教師という意味で言ったのではない。

「ありがとうございます」

はつきりと言ったその声を聞いて、飯盛校長は全て知っていると知らないとも見える表情で、

「どういたしまして、幹君」

とだけ言った。

久々に名字で呼ばれたのにも驚いたが、何よりも自分の名前を知っていたことに意表を突かれた。

部屋を出て、戸を閉めると、晴花が俺の顔を覗き込んだ。

「校長先生と知り合いなの？」

「……いや、どうだろうか」

「どうだろう、ってどういうことよ」

「本気でどうなのか分からないからどうだろう、と言ったんだ。もう訳が分からなくなってしまったじゃないか」

「私も分かんないわよ!」

晴花が俺を強く押す。正直痛かった。

「お前ら、いつも仲良しなことはいいが、そういうのは人前で見せるものじゃないぞ」

杉田先生ではない方の教師が笑いながら言う。いつも？ この人は俺たちを知っている？

「仲良くありません」

……そうだ、この先生は俺のクラスの担任、相良先生だった！自分のクラス担任まで忘れるなんて、俺の記憶力はおかしくなっている。

急に晴花が黙り込んだ。たまにあるけど、一体何なんだ？

俺が何か悪い事でもしたか？ ……まあいい、今日は一つ、良いことを知ったから。

教室に帰る途中、俺は3年前のあの日のことを思い出していた。

〃

……雨が嫌いだった、あの頃（今も少々嫌いである）。家を出ることも嫌になり、しばらく中学校を休んだ時期もあった。ちょうど、梅雨の時期もあったのだろう。じめじめとした空気に、心まで湿っぽくなりそうだった。

そんなとき、家族が”書道”を勧めてきた。家でもできる、という理由からであった。

初めは字を書くぐらいで、何が書道だ、と思っていた。でも次第に、書を書くことには、精神力が要るということが感じられてきた。いい字が書けたときの喜びが、こんなに良いものだとは思わなかった。

ある日、書道の雑誌を読んでいると、1人の書道家の作品が、見開き1ページ分折りたたまれて大きく載せられていた。

書いてあった字は、”雨のち晴”^{はれ}という、聞けば何でもない一句

だった。

しかし、書には”雨”という字と、”晴”という字が対照的に描かれていて、まるで絵画のような印象を受けた。”雨”なのに、踊るような字体。”晴”なのに、哀れみのある字体。

それまで雨が嫌いだった自分が、これまでの”雨”、”晴”の概念をひっくり返されたような気分だった。その後じっくり読んでみれば、

『雨で救われる人もいれば、晴で苦しめられる人もいる。日本人が持つプラスマイナスの原理を、書道という、一種の芸術で逆転させたかった』

この文が下に添えられていた。

これがきっかけで、俺は学校に行くことを決めた。遅れを取り戻しつつも、書道は続け、誰にも負けない精神力を身につけるため日々努力してきた。日々努力している。

俺を救ってくれた書道家は、たった1年で書道界から姿を消したものの、あの言葉は今も胸に響いている。

あの言葉が、今の俺を支えている。

一瞬でも、晴れ間を見せてくれたその人を、俺は今でも尊敬している。

その飯盛 双玄は、もしかしたらこの学校の校長のこともかもしれない。校長先生の名前も思い出した。飯盛 莊一^{そういち}。言われてみれば、似ている気がしなくもない。

俺の勘違いでもいい。もし、あの人が双玄なら。もし、あの人も、俺に気づいていたら。

サインが欲しい……

」

「もう、せっかくいい話だと思ったのに。サイン欲しいって……ばか！」

「また見られた。すごく恥ずかしい事見られた」

……雨が嫌いだった、サインが欲しい……。日記に綴った最初と最後をつなげると、なんとも意味不明な文になるが、俺はすでに教室に戻っていて、日記にものすごい速さでこの思い出を書いていたらしい。

晴花に「ばか！」と言われて頭を小突かれるまで、全くの無意識であつた。

時々、いや頻繁にこの現象は起こっている。そして、なぜかそれまでの会話も知らぬうちに覚えている。……こういうことで俺は記憶力を無駄に使っているに違いない。

「ばか、あほ、まぬけ！」

晴花は涙を拭ってそう言った。そんなによく話だったか。

「うん、お前はばかであほでまぬけだな！」

1人増えた。さっきの謎の生徒だ。明日から1週間、会わなくなるから、顔と名前だけ、一致させておこう。

「聞きそびれてただけど、お前の名前は？」

「ああ、そうか、覚えてないか……。オレは、金剛寺^{こんごうじ} ライタ。1週間後には覚えていてくれよ……」

悲しげな、寂しげな表情で、そう言った。こいつがライタか。何で名前がカタカナなのかなあ、と思って自己紹介を聞いていた。そういえばそのとき、ノートに何か書いていて、顔は見えていなかった。

金剛寺 ライタ。

確か、日本人とオランダ人？ のハーフとかなんとか。詳しいこ

とは何だかんだで覚えていない。俺のばか、あほ、まぬけ！

瞳の色は黄色に近く、染めていないのに明るい栗毛の短髪。最近知った言葉でいうと、「異邦人」という言葉がよく合う。

第一印象は覚えても、名前を覚えなきゃいかんだろう、俺。

やっぱりその後1週間、彼は学校にはいなかった。この一件により、俺は晴花が気になっていたことすら、忘れてしまったのだった。しかし、俺が以前より晴花を嫌悪することが無くなったのは、こうなっていないなら起こらなかった事態だ。まあ一応、あいつにはお礼を言っておこう。

時は過ぎ、五月の最後の日を迎えた。

(6) 雲が近づいて

今日は、五月三十一日。衝撃的な初登場から、1週はさんで（まあ、その辺の理由は前頁をみてほしい）ライタとそれなりに話すようになった。

言っちゃ悪いが、ライタが生徒を投げ飛ばしてくれたせいで、クラスでの俺の立ち位置が変化した。いろいろ途中の経過を省いたけど。……結構格上？になってしまった。せつかく孤立しないように、話し相手をクラスで着実に増やしていたというのに。要するに人間関係がリセットされてしまったわけだ。俺はもう、ライタ以外に話し相手がいないというのか……

ここで俺の頭は叩かれる。これは晴花のだな。流れで分かる。

「私は話し相手には入ってないのか！」

「うつ……そうだけど」

叩かれたところがじんじんと痛む。素早い手首のスナップから繰り出される平手打ち。

そういえば、晴花って卓球やってたっけ。関係ないか。まず、こんな冷静に分析している場合じゃない。なぜなら、

「……そういうことは、はつきり言うのね……」

晴花が悲しそうな表情に変わったからだ。そういうつもりで言ったんじゃないくて。

「俺は、お前を、ただ」

話し相手だと思っていないだけだ。もっと、とくべつな。

「ただクラスに入ってくる、邪魔者ってこと？」

もう泣き出している彼女に、うまく言葉は伝わってないようだ。てか、こういう時にこそ、心を読むべきじゃないのか、晴花！？

「お前、涙もろくなつたな」

こう言ってから、少し間が空いた。そして、

「……え？ 私、泣いてた！？ な、何で！？」

すぐに涙を拭う晴花。俺も正直よく分かりません。

「私、ちよつと前の記憶が無いんだけど。時雨、私を泣かすようなこと言つた！？」

記憶が飛んでる？ また厄介なことを言い出したな。

「見当がつかない。俺も戸惑つてたんだよ」

本当は若干見当ついてます。謝る機会を見失いました。すみません。こういう時は、心を読まれたくないんだが、

「何なの！？ 一体私に何したの！？」

……これは、読まれましたな。仕方ない。

「どこまで、覚えてる？」

「うゝ、時雨の頭を叩いたら、私が泣いてた？？」

つまり、その間の記憶が無いと。そういうわけか。どうも都合のいい頭をしているようだな。俺の頭を叩いたことが泣いたことで正当化されている。

ということは、こちらがものすごく一方的に恥ずかしい思いをしただけか！

「説明するのも難しいんだが」

「いいから、言つて！」

いつにも増して必死だ。自分の知らないことがあるのが許せないのか。

「俺の、話し仲間の中に、お前がいなくて………だろうか」

「そ、それはかなり刺さるわね……」

「でも、話し相手じゃないってのは、違う意味で言つたのであつて！」

俺も必死だ。何でこんなにむきになつてゐるんだ？ 俺は。

「うん、分かつてる」

「まただ。また、彼女は」分かつてる」と言った。前に聞いたのは、俺が悩んでた時だったか。そのときも、そして今も、何かを知ってるような顔をしていた。

晴花が、時々分らない。いつもは、もっと単純なのに。

「ま、私はとてもすすきりしたから、安心して」

まるで俺が慰められたみたいだ。何で。

「さつきと立場が逆なんですけど……」

「気にしない、気にしない！」

急に機嫌がよくなったな。しかも、今回はチャイムが鳴る前に教室を去っていた。

「一体何があつたんだ？ 俺、良いことでも言ったのか？ 疑問が残ったまま、今日の日が暮れる。」

明日から、六月が始まる。梅雨は明けるが、俺にとって油断はできない。六月には、俺の誕生日が待っている。俺の2番目に嫌いな時だ。ちなみに1番嫌いな時期は梅雨であることは言うまでもない、なのに言ってしまった。

何て残念な俺。

(1) 曇り、微妙な天気は何を呼ぶ

六月三日。今度は曇りの日が続いている。この2か月の傾向から、この区域の天気は、俺と晴花の気持ちの強さによって左右されるらしい。科学的実証はないものの、晴花には心を読む、という超人的能力が確認されているため、彼女の方はほかの力があってもおかしくはない。

その上、俺の雨運が重なれば、天気が俺たちの気分で変えられるのは、当然のことではないだろうか。

俺の思い違い、自分の能力に期待しすぎというのもあるが。

とにかく、そういった前提を置いて話を進めると、曇りの日が続いているのは、俺と晴花の気持ちの均衡が保たれているに違いない。俺の場合、いわゆる”気持ち”の概念は、感情的になるようなことが起こると強まる。前に色々な誤解・困惑があったが、そのときは、俺の気が不安定だったから、晴花に負けて、晴れの日が続いていたのだろう。

”気持ち”という抽象的なものを説明しようとする、やはり一例を挙げないと理解に乏しいだろう。

……説明したところで、分かってもらえたかどうかは謎だが。

一つ、気になることがある。これまで長年一緒にいた晴花が、高校に入ってからいつもと少し違う時がある。俺の心を読まなくとも、俺の言いたいことは直感している、みたい。どや！みたいな顔とは違う、悟りを開いた感じの顔で。もともと、彼女には心を読む能力なんて無く、俺の思うことは雰囲気で分かる、という考えも有り得る。そういえば、小学生の頃まで、いつも一緒にいたから……

あ、前髪伸びたな、俺。

書いていることを急に变えたのには、ちよつとした訳がある。というか晴花本人がいれば、そりゃあ書きたくなくなるよ。

「あつ。何てことしてくれてるのよ、時雨。もう少しだったのに」
惜しい、といった表情で、俺の頭を手で叩きそうになるのを、瞬時に掴む。晴花は急に手を引つ込める。ちよつと掴みが強すぎたか。
「人に見られる前提で書いているんじゃないんだ。俺の勝手だろ」
「そうだそうだ、しぐれの言うとおりだぜ」

1人、ギャラリーが増えた！？ ライタ、お前までもが。

「……しぐれ。オレは決して日記なんか見ていないからな。決してお前がこの子に気があるんじゃないかとか、はたから見れば恋人同士にしか見えないとか、そういう疑念は持ってないからな」

思ったことを言ってくれるのは、こういう時あまり良いとは言えないな。

「正直に話してくれてありがとう、ライタ」

少し皮肉めいた言い方で言ってみても、気づかないんだろうな。

「ああ！ 信じてくれるのか！」

晴花も俺の皮肉には気づいたんだろうか。ライタをただじつと睨みつけている。が、当の本人は全く視線に気づいていない。どれだけお前は……

しかし晴花の睨みが半端なく鋭いな。様子もちよつとおかしい。

「わ、私は……恋人とか……思ってたなんか……いないし」

途切れ途切れの言葉をつなげると、俺の心に少しだけ変な気持ち
が混じってきた。

それは、もやもやした、雲のような感じがした。

「私は、時雨のこと、ただ……！！」

始業の鐘は、彼女の言葉に重なる、いや彼女の言葉を覆う。

実際は、そこまで音量は高くないはずだが。

それでも、彼女は言いたいことを言ったようで、その場をすぐに走り去る。ライタも自分の席、俺の右前に戻る。あいつには、聞こ

えたのだろうか。気になる。

次の授業・5時限目は、数学。数学と言えば、晴花のクラス担任、あの堅苦しい杉田先生か。

毎回、2、3人が眠りにつくこの授業。それでもつて杉田先生が教えているとなれば、説教は避けられんだろう。あの怒号はクラス皆が静まりかえってしまつたため、その後のチョークの音が妙に響き、恐ろしい思いでこっちの心臓がもたない。

それでも、眠る生徒がいるのだから、俺の怒りは当然その人たちに向く。でも、怒ったりはしない。できない。小心者の俺には。

杉田先生には珍しく、5分遅れで入つてきた。それで、急いで授業を進めたいのに、早速、昼休みから寝ている者が1人。彼の怒りが飛ぶ。そう思つた瞬間。

「……おはようございます」

前の戸から鞆を背負つて入つてきたその男は（おそらく同い年なんだけど）、今まで空席だつた俺の隣の席に、鞆を下ろして座る。予備の机椅子だと思つていた俺は、驚きを隠せなかつた。

そういえば、いつも”こうがみ鴻上 やくも八雲”は出席簿において休みだつたか。

「……おお、鴻上。今日から登校できるようになつたのか」

そう言う杉田先生は、彼が入学式の日から今まで休んでいた事情を知っているらしい言い方だ。

どうやら、彼のおかげで杉田先生の怒りは冷めたらしい。いつの間にか、寝ていた生徒も起きて鴻上らしき人物をちらつと見て驚いていた。

「よろしくね、幹くん」

少しかすれた低い声。灰色がかった黒髪は、後ろはちよつと長め

で、前髪は眉のあたりまできている。

やっぱり、名字で呼ばれるのは新鮮味があるなあ。

この鴻上 八雲には、何か不思議な雰囲気を感じた。あながち間違いないのかもしれない。

(2) 晴のち雨 (前書き)

晴花視点での回想です。

このタイミングで入れたのに、特に理由はあるわけでもなくはないです。

他と比べると、回想編のため、若干長めです。

書き切りました。

(2) 晴のち雨

六月上旬。曇りの日。彼女は何かを言い捨て、一年二組を出た。言い捨てた言葉は、5時限目始業の鐘のせいで、相手にはよく伝わっていないだろう。

鐘が鳴り終わると同時に、彼女は廊下へ飛び出した。自分のクラスに戻るまでの間、何を考えてたのかは覚えていない。しかし、教室に戻ってから、気分が悪いのを理由に、保健室に向かったのは覚えていた。保健室の先生に、いろいろ事情を説明して、なんとか授業をさぼること”は許してもらえた。

自分の思い、悩みを、どれだけ打ち明けたか、夢中になっていてこれもはつきりと覚えていない。

その後、先生に「ノートにでもその思いを書いた方が良く」と勧められたので、整理しながら、彼女は新品のノートに自分の思いを綴り始めたのであった。

〃

私は、いつも時雨についていました。物心ついた、幼稚園の頃には、知らないうちに時雨と遊んでいました。駆けっこ、砂遊び、まごこと、ブランコ。遊べるもので何でも遊んでいました。

小学校に入ると、時雨はたまにしか遊んでくれなくなりました。その時の私には、彼しか遊び友達がいなかったのです。

同じ時に気づいたのは、時雨の近くにいと、雨がよく降ることと、私に、人の心を感じ取る能力があったことでした。

時雨と一緒に遊んでいるとき、砂はどろどろになって、いつも”お城”は完成しませんでした。駆けっこも、家に帰ると服がびしょ

びしょ。今考えれば、とても恥ずかしいことなのですが。ままごとだって、帰ってくる夫（役）は、雨で濡れて帰ってきました。ブランコだけがをしたことも、しばしばありました。

また、私が家族にその日の夕飯のメニューを聞こうとしたとき、その直前に自分からそのメニューを口走ることもよくありました。家族の皆が私に内緒で進めてきた、私の誕生日ケーキの計画も、そのせいで（自分からその計画については、あえて言いませんでした）驚くこともなく、家族に子供ながら申し訳なく思ったこともあります。

良い所もあれば、悪い所だってあります。その心の内に、いつも嬉しい答えが待っているとも限りません。

私は、そのせいもあってか、他に友達を、積極的につくらなくなりました。

1人で近くの公園のブランコに乗っていた時のこと。偶然、彼はその公園にやってきました。あるいは、それぞれの家族同士で、何か話し合ったのかもしれませんが。しかし、どちらにせよ、彼が、幹時雨がその場所に現れたことが、私にとって純粋に嬉しかったのです。

彼は言いました。「僕たち、ずっと友達だよ」と。

その時私は”ずっと”の部分に、嬉しくも悲しくもありました。今思えば、両方の感情を持った理由もよく分かります。

それから、私は一層時雨についているようになりました。たとえば、クラスが違って、休み時間は一緒にいたい。話をしたい。私は、純粋に時雨と友達でいたかったのです。

中学校に入ると、時雨はあの時よりさらに近づいてはくれません

でした。昼休みだけは、彼も許してくれましたが、その頃も私には”ずっと友達”の言葉が響いていたのです。

馬鹿だと思われても仕方ありません。私にもさすがに女友達はそこそこいました。皆が口を合わせて、「仲良しなんだし、付き合っちゃえば」と言いました。その時初めて、私は自分の気持ちに気づいたのです。

話は高校まで進んで、私は中学校の頃と同じように時雨のところへ行っていました。やはり、クラスは一緒ではなかったのだ。

五月のこと。彼は、日記を始めたようでした。その内容は、日記というより”思想の集まり”のようなものでした。私には、そのどれもが、きらきらと輝いているように思えました。

でも私は、その思いとは裏腹に、日記のことを「小学生みたいな日記」と称してしまいました。自分の思いに気づいてから、時雨に素直になれなくなっていたのです。

当然彼は起こりました。口げんかで、私が彼にかなうはずがありません。成り行きで「ダサメガネ」と言ってしまったのはいいとして、彼を怒らせてしまったのは私も心が痛みました。

次の休み時間に、彼に謝りに行こうとして、「日記の続き」を聞くとした私も、素直になれていませんでした。

次の日、私はまた時雨のところへ向かいました。私は時雨の気持ちを知りたかったのに、時雨が私のことが嫌いだと、彼に言わせようとしていました。その時、ふいに言われた、「お前のことが好き」に驚いた私は、つい声を上げてしまいました。

数日後、私はいつものように振舞おうと、時雨のクラスに行きました。

彼は、変わらず日記を書いていました。その内容の、

”晴花のことが気になっている”

に、私はまず驚きました。本当なの？ と、聞きたいくらいでした。

読んでいくと、”気持ちの強さ”によって変わると思っていた天気が最近おかしい、というような雰囲気の記事が書いてありました。それは単に気弱くなっているだけなんじゃ、と思ったのはさておき、”雨男”に対抗する”晴れ女”と仮定して、私が挙がっていました。それだったら、今までなぜ晴れなかったんだらうと、率直な思いがありながらも、私はいつの間にもやら時雨の頭を叩いていました。

日記を見られて戸惑っていた彼を見たのはそれが最初でした。やっぱり1行目のこと？ と思つて、一つ、「心を読んだ」という冗談を言ってみました。実際、彼の心は複雑で、いざという時にしか見たりはしないのですが、このときは、卑怯になるから、絶対見ないと決めていました。

急に黙り込んだ彼は、何か考えている様子でした。

「ここ数日の俺がおかしいのも……」日記のことが本当であれば。いや、そうであつてほしいから。

私は、分かっている、と答えました。その直後、廊下側から大きな音がして、彼の真意を聞き損ねてしまいました。

成り行きで、校長室に行くことになった（正確には、そうだった時雨についていった）私は、歩きながらノートに書き続けている時雨の背中をずっと見ていましたが、我慢できずノートの中身を覗き込んでみました。

残念ながら、私のことについては、彼の中ではノートには残らなかったようです。話しかけても、「日記を書くのは俺の勝手だろ」と言われ、私は校長室に着くまで、気持ちの整理がつきませんでした。

時雨の心が読めるのは、ほんの一瞬の隙だけです。

例えば、”俺もあんなことできないかなあ”という願望が表れると、勝手に私に伝達されるように、すつと頭に入り込んできます。それをきっかけにして、一言二言の心の呟きを、読み取ることができます。

校長室に入る直前、そんなことをして時雨がしょんぼりしたのを見て、私は気が少し楽になりました。

校長室を出る直前、校長先生を見て何かを呟いた時雨がとても気になり、私は気が少し惑っていました。

気になって彼に聞いてみると、「自分でも訳が分からない」というので、あれこれ私が言っていると（途中、彼のことをかなり強めに押したような気がします）、彼のクラスの担任である相良先生に”仲良し”と言われ、私はそのこととても喜びを感じました。彼は、「仲良しじゃない」と言いましたが。

時雨のクラスに戻って、彼はすぐにペンを走らせながら日記に何かを綴っていました。

内容は、校長先生の意外な正体（？）に関してと、彼の思い出でした。

そういえば、時雨は書道習っていたっけ。部活も確か、書道部。そう思いながら、私は私が知らない彼の思い出に触れて、涙がこぼれました。

あの時、最後の文を見て、時雨に突っ込む前に涙を拭いておけば、時雨に私の涙を見られずに済んだのに。

不運にも、彼のクラスメイトにも見られたのには、とても情けないと思いました。

その後1週間、彼のクラスメイト、金剛寺 ライタ君は、学校では見かけなくなりました。しかし、きっかり1週間後には、違和感なく私と同じで、時雨の周りにいたのです。

五月最後の日、時雨にとっては梅雨という節目にさよならを告げる楽しい日です。私にとっても、嬉しい日……のはずでした。

話し相手の中に、私がない。

日記を読んで最初に思ったこと。彼に直接聞いて、はっきりと言われたこと。その時私は、本当に自我を失っていました。その間の私は、まるで心だけが別の場所に飛ばされたような感覚でした。

少しして、遠くから「涙」という言葉が聞こえてきました。涙は、できるなら時雨に見せたくなかった。そう思っていたはず。

我に返ると、やはり私は泣いているのです。なぜだか、もやもやしていて、まるで雲のような気持ちがありました。……こんな表現、時雨しか使わないかな。

その間私は何を口走ったのか、とても気になりました。時雨の微妙な表情を見る限り、まさかあのことを。こういうときにも、一瞬だけ、こぼれた気持ちの片だけ拾えることがあります。

すみません、と聞こえたので、なんとかあのことでないようです。

すっかりした私は、彼の言いたいことが何だか分からなくても、分かっているような気がしました。

逆に、少しでも罪悪感を持つてくれたらしい時雨を慰めていました。……やっぱり、時雨は。

六月上旬のこと。私はいつものように彼の日記を覗き込みます（人には”覗く”という言葉を使わないで、私はこういう表現をよく使っています）。

今度の理論は、”私と時雨の気持ちの均衡”でした。私の中では、もう正解に近づいている！ と思い込んでいました。

私の存在に気づき、日記の中で話をそらす、という新しい技法を用いた時雨に、思わず手で叩きそうになりました。それで瞬間的に掴まれたのですが、さらに私は驚いて、あわてて手を戻しました。

この後言われたライタ君の言葉で、私は飛び出してしまったのです。

「恋人同士に見える」

動揺して、言葉がつかえました。

私は、時雨のことを、恋人とか思っていないし。

そう言ったつもりだったのに。……いつそのこと、私の気持ちを今ここで出し切ってしまうのか。それは学校のチャイムによって遮られ、彼には届いていないのでしょうか。

でも、このノートに、その思いをとどめておけるなら。私は、自分の気持ちを今ここで。

私は、彼を、幹 時雨のことを……………。

〃

そのノートの続きは、その時、彼女以外に知る者はいない。

(3) 曇りも警報注意報に入れようか (前書き)

時雨側に切り替わります。

(3) 曇りも警報注意報に入れようか

数学の授業は、鴻上の登校によって、空気が凍りつくことなく無事に終了した。詳しく言えば、それは杉田先生が、鴻上の登校で拍子抜けした。

というよりは、鴻上の登校で目が覚めたクラスの生徒が、好奇心に駆られ、授業中冪えてしまった、と言った方が正しい。

授業が終わった途端、彼らを筆頭に、群衆となって鴻上の周りに集まった。

そのせいで、隣に座る俺は身動きが取れない。取れません。助けてください。

荒れた海でマグロが引き上げられる感覚で（味わったことありません、マグロじゃないから）、俺はライタに救われた。その状態は……、まあ言葉では表せない。表したくない。

一応男として（いちおうって何だ！？）、棒のように引っ張られる俺って、何なんだ……。

体中だけでなく、心にも”傷”がつかしました。俺、今度から自分のこと「もやし」と呼ぼう。あくまで「もやし」じゃなく「もやし」です。そういう点に微妙にプライド持ってますから……！

……誰に語っているんだ、俺は。……晴花がいるわけじゃ、ないのに。

ライタにとりあえず礼をして、それから晴花のクラスに行ってみよう。何となく、謝らなきゃいけない気がする。今を逃したら、もうこんな機会は無いい気がする。

そんなことを考えて、ライタに

「こんなもやしを助けてくれてありがとう、俺は一生、君を忘れるよ」

「色々突っ込みたいんだが……ひとつ言わせてもらうなら、もや……何て言った？」

様々な謎を彼に投げかけ、俺はクラスを出ようとした。ライタは、まだ気になっているようだったが。

”出よう”として、俺はライタとは違うものに引き止められた。

”なんというか、殺気？ いや、執着？ ……何か黒いものに背中をがっしり掴まれている感覚。

黒いものだと思ったのは、掴まれているところから、殺気や執念、嫉妬などが入り混じった感情が流れ込んできたからだ。

「ちよつと待ってくれ」

最初と違って声が高くなっていたのに、それが鴻上だと分かったのは、何故だ。

「この休み時間だけでいい。幹君、僕と話をしないか？」

ゆっくり振り返ると、すでに彼の周りに群衆はいない。

時間で言えば、たった1、2分の出来事だった。それも簡単に群衆は消えるものなのか？

「あ、ああ。分かった。分かったが、できるだけ、話は簡潔に、早く済ませてもらいたい。今しなきゃいけないことを、次の授業に遅れぬように、済ませたいからな」

異様な雰囲気に向け、彼の話を聞こうと自分の席に座った。

「佐久さん、のこと？」

酢酸？ 一瞬、本当に聞き間違えた。彼は人を名字で呼ぶようだ。それにしても、なぜ晴花を。

「ああ、少し気になることがあって」

如何せん、彼の読みは正しかったので、正直に言う。

「そっか……。佐久さんは、まだ……」

俯く鴻上。やはり最初の低いのから声色が変わっている。印象も、まるで違う。

「知り合い、なのか？」

その質問に、鴻上は少し驚いたように見えた。

「……そのうち分かるよ。僕は佐久さんを、素敵な人だな、と思つてただけで」

素敵な人？ 少々疑問が残る。その続きを、鴻上は言つてはくれなかった。代わりに、

「うん、話せて良かったよ。用事があつたのにすまなかつたね」

こんな締め言葉が発せられた。まだ何も話せてなくないか？ とはいえ、俺の用事の方を考えて、話をまとめてくれたらしいので、

「いや、こちらこそ、ありがとう」

礼だけを言つて、俺はクラスを走り出た。

「彼女のために、何ができるのか。考えたことはあるのかな、幹君」
その声は、俺には聞こえなかった。

思いつきで晴花のクラス・一組に向かつたものの、正直何を言つて謝ればいいのか、そもそもどうして謝るのか、むしろクラスに入るといふ行為が、腑に落ちない。

他人の”なわばり”に勝手に踏み込む、という感じがして、いつもの晴花のように、いつの間にかクラスの空気に溶け込むというような高等な技術など、俺には到底できないのであつた。

そうこうしていると、あつという間に一年一組に着いた。とかすぐ隣だから「あつという間」なのは当たり前なのだが。

これって、前の扉から入るべきなのか！？ 存在を薄くして潜入するために、後ろの扉から……

「おお、時雨。珍しく自分から彼女の方に行こうとしてるのか？」

背後からした声は、親しみのある、野太い声だった。

「相良先生……ですか」

二組のクラス担任、相良さがら 史彦ふみひこ。言いやすい名前、といつては失

礼か。

「もう入学して2か月経つのに、担任の名前をうる覚え、か。なんか寂しいな。」

……さつき一組で授業してきたが、佐久は保健室だったぞ。気分が優れないとかで」

「えっ、そうなんですか」

言葉を失った。風邪をひいたことも、見たことなかったのに。

しかもこのタイミングで、保健室だと……！？ 完全に俺の責任じゃないか。事態は思ったより深刻かつ重大なようだ……

「次の授業、ホームルームですよ」

「ああ、そろそろ文化祭の話もしないとな」

急に話を変えても動じない。この先生は、何かに気づいているのか。これから俺が言う、何かに。

しかし、俺は下を向いたままで、先生の表情を窺^{うかが}うことはできない。

どっちにしても、だ。俺の申告することは、変わらない。

「俺、次の授業、遅れるどころか、”さぼる”かもしれません」

「・・・この場合、”さぼる”じゃなくて”やすむ”だろう？」

「はい。では次の授業、”やすみ”ます」

「断言したか。たった2か月だけど、お前は”人”だってよく分かったよ」

はっはっは、と高笑いしながら先生と俺は対極へ向かう。

俺が、”人”ってどういうことなのか。はつきりはしなかったが、俺はあの先生の持つクラスで良かったと、改めて思った。

「廊下はなるべく走るなよー！」

職業柄、言わなければならないことを、明らかに棒読みで叫んだ相良先生のクラスで。

一年一組から一年四組までが、この校舎の2階に、1階には五、六組がある。保健室は、その六組の隣にある。階段を下りてすぐだ。

何で、こんなに息切れが激しいのだろう。

何で、こんなに必死に駆け下りているのだろう。

何で、こんなに心が苦しいのだろう。

1階に着くと、もう目の前に保健室のプレートが見える。

入って、会って、話すんだ。あの時、何て言ったのか、よく聞こえなかったんだ。俺には、俺自身の心が、よく分からないんだ。

こんな真面目なこと、言えるのかな。

あくまで俺は、” 笑い ” を。

あくまで俺は、” 晴れ ” を。

求め続けなくちゃいけないんだ。昔、決めたじゃないか。

「俺は、お前の晴れが見たいんだ」

「…………え？ し、時雨!？」

「ん、あ…………!」

つい保健室の戸を開けてその言葉を口に出してしまった。” つい

” でここまでできるか、俺!？」

目の前には、黒髪を背中まで下ろし、ヘアゴムをくわえて（さっきの拍子に落とした）寝床に座る同級生らしき少女の姿。うゝん、どうしてだろう。晴花の声がしたのは。

「何で、時雨がここに……。てか、授業始まつ」

「は、晴花なのか!？」

俺は自分でもわかるくらい、目を見開いた。おいおい、こんなに髪伸ばしてたのか!？ いやそれよりもまず、本当に晴花なのか!？ この子が？

「うん、親の呼び名をずっと聞き間違えていなければ」

「そうか……聞き間違えていたんだな」

「なぜにそうなるかつ」

この突っ込みは、間違いなく晴花だな。こんなんで分かる俺って

……。

「しかし、なんでお前の髪の毛が大量に生えている？」

「いや、前から生えてたからね。変な育毛剤とか使ってないからね」
「そういえば、いつもは後ろである程度まとめて、肩までで収まっていたような。あまり髪型を気にしてないからなあ。」

「それより、さっきの言葉は何？」

「さっきの言葉？ …… ああ。」

「……えと、俺何て言っただけ」

「自分で覚えてないの！？」

「雰囲気は覚えてるさ。一字一句間違えず言えるかが、問題なんだ」
「そっちの問題！？」

実際は、嫌にはつきり覚えている。だが、改めて同じことを言う
となるとなあ……

そうして考えるフリをしていると、晴花がため息をついて肩をすくめた。

「時雨の嘘って、分かりやすすぎて何か突っ込むのも面倒だわ」

「な、何だと……！！」

と、それっぽい驚きを試みる。まあ、これも晴花から見れば、
ぎこちないんだろうけど。

「お願いだから、もう一度、私に言って」

そんな真剣な眼差しで俺を見るなあ！ 俺がすごく大人げなく見えるじゃないかあ。

なぜかその眼差しに、一瞬でも「言っちゃまおうぜ」という気分になっちゃったので、

「承知致した。拙者が一寸前に申したことを貴殿に改めて伝達申し上げます」

いつの時代か分からない話し方になったのだった。

「あ、うん。どうぞ」

どうやら、これにはついていけなかったようだ。

「……俺はお前に、悲しい顔をされたくない」

「違う。……もっと、しつくりくる事言ってた」

う……。そっくりそのままリピートしろと、そう言うのか。言うてから相当後悔してるんですけど。

「お前の晴れが、見たいと」

「晴れて、何？」

ま、まだ追及してくるか。もうこんなに頑張ることは、二度としないぞ。

「……笑顔、かな」

「……！！」

俺が言った瞬間に、寢床のカーテンを閉められた。

え、何この状況？ 俺、すべった？ それとも失笑？ どっちも同じか。

「……しい」

「え？」

今のこの状況で椎茸？ 違うよな。

「嬉しい……の」

「ほ？」

謝りに来たのに、感謝されてしまった。やっぱり俺は晴花が分かりません。

「俺、謝りに来たんだけどさ、怒ってるわけじゃないのか？」

「え、何を謝るのよ？」

「なん……だと」

じゃあ何で、あのタイミングで保健室に？ 疑問がまた浮かぶ。

「もしかして時雨、自分のせいだと思ってここに来たの？ ……間違っ
てはいないかもしれないけど、謝られるようなことじゃないから。
あの時言ったことが、あまりにも恥ずかしくて、それで教室じゃ
なくて、こっちに」

「……そうか」

ん？ 疑問が解決したとたんにまた疑問が浮かぶ。

「俺のせいではあるのか？ あと、チャイムのせいで、まともに聞

こえなかったんだが」

「はあ……、やっぱり聞こえてなかったか」

晴花はまたため息をつく。でもさっきとは違う感じがした。

「俺も言っただから、晴花もその内容を言うべきじゃないのか？」

「い、嫌よ。ほんとに言いたくない」

「なぜに？」

「その理由も、言えない」

「なぜに？」

「その理由の理由も言えない。ついでにそのまた理由も、言えませ
ん」

くっ、先を越されたか。

こっちの心は見え見えなのに、向こうのは分からないからなあ。
不公平すぎるなあ。

「何か、納得いかない」

「そう？ 私はすごく爽快だけど！」

カーテンを開けて、背伸びをし、立ち上がる。

「せめて、ヒントだけでも……」

情けなく食い下がるも、

「知りたければ、私の心を読んでみなさい」

無理なようなので、諦めることにした。

さっきまで何であんなに必死だったのか、さっぱり自分でも分
らないまま。

ふと見ると、開いたままのノートが晴花が座っていたベッドの枕
元に置いてあった。

「それ、お前も、日記書いたのか？」

すると慌てて晴花がノートをわしゃわしゃと雑に閉じながら、

「う、うん！ そんなところ！」

かなり焦っているようだったので、（晴花のように）それ以上追
及はしなかったが、ぐしゃぐしゃにしたせいでちぎれたノートの一

片がこちらに飛んできたので。

「きなのです?」

拾って読み上げるのは、当然ですよ。でも、その後すぐに、

「ひ、ひゃあああ! 見ないでえ!」

顔面に渾身の一撃を食らうのでした。

ひらがな五文字しか読めなかったんで、ノートの中身を知らないも同然なのに。いつもは人のを読むのに。

……あ、これを”走馬灯”っていうのかな。

小さなころの思い出が流れてきている。

一つ、大事なことをここで思い出した。

ゆっくりと倒れゆく俺。

頭が床に思いきり当たる俺。

ちようど戻ってきた保健の先生。

先生、患者が1人、増えました。

(4) 目の前が真っ黒でも真っ白でもなく真っ灰だったら、微妙な気持ちにな
鼻血は、残酷な描写になりますか(！?)

境界線がわかりません！

(4) 目の前が真っ黒でも真っ白でもなく真っ灰だったら、微妙な気持ちにな

「気絶はしていませんから、大丈夫ですよ。顔以外は……」

「ほらふらついてるでしょ。軽く脳震のうしんとう起こしてるみたいだから、今は横になっていなさい」

医務係の篠原しのはら先生は、そう言って起き上がるとする俺を無理やり戻す。

「時雨え〜。ごめんなさい」

さつきから涙を流して謝り続ける晴花はるか。

気づけば、鼻血を出している。まあ、当然か。

「鼻血も出しているの？　じゃあ、座った方がいいわ」

今度は起き上がることを許される。

今の俺のポーズを例えるとするなら、”真っ白に燃え尽きた”ような感じだ。しかし真っ赤なそれは、真っ白なガーゼをにじませる。

あ、日記持ってくれば良かったな。

「・・・そうだね。それを話したら、ただの独り言になるもんね」

「あ、今俺しゃべってた？」

「確実に、はきはきした声で」

晴花の目に、まだ涙が浮かんでいる。やはり、俺の方が悪く思えてくる。

「謝るのは、俺の方が、晴花の方が？」

「ノートの切れ端をよく見たら、ひらがな五文字しか書いてなかったけど、読み上げたことには謝ってほしいな。……いや、やっぱりごめんなさい」

「俺が”もやし”でごめんなさい」

「……今何て？……もやし？」

”もやし”が浸透するまで、まだまだ時間がかかるようだ。

「晴花、”もやし”じゃないぞ”もやし”だ」

「時雨、”もやし”じゃなくて”もやし”なの？」

同じことを反復されても答えは同じだ。

「もやし」

「……ほおお。もやし、ですか」

納得したとしてもしていないとも、といった表情で、晴花が言う。そんな不思議な言葉か？ もやしは。

「髪型、戻さないのか？」

「時雨、どっちの方が良いと思う？」

前と今の髪型のことか。よく分からないから直感で。

「人の髪型にとにかく言うつもりはないが、あえて言うなら、今の方が」

「そう、そうなんだ。じゃあ今度から、これに……する」

俺の意見で決めるものか、と思った。

しばらく互いに静かになり、

「教師が聞くのも何だけど……、2人とも、付き合ってるのかしら？」

ずっと話を聞いていたらしい篠原先生が、間に割り込む。

「えええいやいや、とんでもない！」

晴花はあたふたしている。俺も、そんなこと言われて普通じゃないられない。

「先生、俺は昔からの友人として接しているのであって、決してそのような」

「そう？……ほかの先生方なかむつの間でも、結構話題になってるのよ。今の時代に珍しく、堂々と仲睦まじい姿を見せつけるカップルだって」

「か、かぶ……」

噛んだ、舌も噛んだ。これは痛い。あのライタの感覚は、いたって普通の反応だったのか！

「わわわ私は、そんなこと……」

「いやねえ、晴花さん。自分で言ってたじゃない。時雨くん、こ……」

それ以上は、晴花に口をふさがれ、先生は話せなかった。

「せ、せんせえ！？ それ以上は……絶対！」

絶対、ダメらしい。最近、疑問ばかり残って、もやもやする。

晴花も、先生に乱暴なことしてるな、とか思っ

「晴花、そこまですると、お前が校長に呼ばれることに」

「えあつ、しまった！」

晴花は飛び退く。篠原先生は、ひと息ついて、

「必死ねえ、晴花さん」

苦笑いであることは、言うまでもない。

「ところで、頭くらくらない？」

「え……？」

今気づくと、脳震とうは治った。でも、頭がふらふらして……

「時雨！？」

俺は布団に倒れこむ。

「……あまり、気が動転する話はするべきじゃなかったわね」

体が火照っている。赤いのが流動しているのが分かる。何か、晴花の話には、ついむきになるんだよなあ。冷静になれないというか、なんというか。

そういえば、何か思い出してたような。

篠原先生が何か用具を取りに、保健室を出ていたとき。俺は、（抽象的に表現して）赤いものが止まるまで、座っていた。

制服のワイシャツは、赤いしみがついていて、早めに処置しないと跡が残るので、先ほど保健室の洗濯機に入れてもらって、壁に干してある。

「……あ、小学一年のとき」

「小学、一年……？」

目の前はぼんやりして、晴花がどんな表情をしているのかは分からない。

お前は、覚えているか。

俺は、覚えている。

「ずっと、ともだちだって……」

「うん、時雨、そう言ってくれたよ」

覚えていたか。まあ、そうだよな。

「俺……何で、”友人”って言わなかったんだろう」

「……は？ まだ子供だったからでしょ？」

「俺は、あのとき、晴花とけんかしてた」

「そうだっけ？」

言いたいことがばらばらに出てくるのに、それを晴花は気にも留めず答える。

「父さんに言われて、公園まで謝りに行ったんだ」

「えっと……、私が1人でブランコに乗ってたとき？」

「細かく覚えてるんだな」

「う、うん……まあ、たいせつだし」

言葉の後半は、ぶつぶつ言っただけで聞こえなかったが、俺は気にしなかった。

「あのころの俺は、素直に謝れなかったんだろうな。ずっと」ともだち”っていう言葉で、謝った気になってたんだ。俺はもっとひどいこと言っただよ、晴花に」

「ひどいこと？」

「……覚えてないんだけどさ」

これは本当に覚えていない。

自分がどんなことを言っただか。

どんな言葉で彼女を傷つけたか。

俺はまさか、罪滅ぼしのつもりで今まで晴花と一緒にいたのか？

「いや違う」

「違うって？」

「今、改めて謝っておくよ。ごめん」

「改められても、覚えてないからね……うん、許す。というか、血だらけだった人に謝られると、怖い」

ワイシャツは、薄い跡を残し、壁に掛けられている。今は、その下の（被害のなかった）Ｔシャツでいるが、両手が相当なのだろう。なんだか、前線から帰ってきたみたいだな、そんな感じ（どんな感じ！？）。

「手、洗わないとな」

立ち上がろうとするが、晴花がそれを抑える。

「タオル濡らして持つてくるから、そこに座ってて」

「お、おう」

何だこのやりとり。なんかこそばゆい気分だ。保健室の物、勝手に使っていいのか？

晴花が、濡らしたタオルを、絞って、こちらに持つてくる。

「これで拭くといいよ」

「あ、どうも」

「それでさ、もしかしてそのことを謝るためにここに来たの？」

「いや、殴られた拍子に思い出したんだ」

「う、ごめん」

タオルを裏返して顔も一応軽く拭く。すると、視界がはつきりしてきた。赤いものは、ずいぶん前から止まっているようだ。

「俺の方が謝られてるな」

「そうだね……」

.....。

この沈黙は何だ！？ 晴花も俺も俯いたまま何も話せませんが！？ 何だよこの空気。すごい話しづらいよ。

『あのさ』

言葉が重複した。向こうも話しづらかったらしい。

「何話せばいいか、忘れちゃった」

「俺はとりあえず言ってみた」

.....。

沈黙が再びよみがえる。不死身か！？ 貴様！

何度でも何度でも何度でもよみがえるさ、ってか！？

また何か話そうと口を開いた途端、ばたん、と。

「もう、じれったいなあ！」

篠原先生、仮にも先生ですよ。まさか立ち聞きしていたとか.....

「惜しい！！ 今いいとこだったのに、先生！」

「.....僕は、このタイミングが正しいと思うけど」

ライタに、鴻上まで。後ろには、もっと人が見えるな。.....うん、

クラス単位？

「じゅ、授業さぼって何してるんですか皆あ！？」

俺にしては大きめの声だったと思う。あまりの驚きに、久しぶりに出た叫び。

そして、その声はあっさりと野太い高笑いに負けた。

「はっはっは、時雨が彼女と保健室にいると聞いて、担任として見逃せないと思ってだな。何か大変なことが起こる前にと思ったたら、クラス全員がついてきたぞ」

相良先生は、悪びれる様子もなく堂々としている。

「俺がどんな大変なことをするって言うんですか！！」

このとき、完全に俺の”おとなしい”キャラは崩壊。だって、クラスの皆が証人ですよ。ひっくり返せるわけがない。

「いいわねえ、青春。甘いわねえ」

篠原先生は、どこか遠くを見てずっと思いを馳せている。若い先生はみんな変なんですか。

晴花は、いつの間にか布団に入り、寝たふりをしている。事態の解決は全て俺に転嫁か、はは.....。

「とりあえず、ライタを恨むから。よろしくな」

「何をよろしくって？ もや……」
俺は、がつくりしたまま、気絶した。貧血かな。

その後の説明は、鴻上が全てしてくれたいらしい。

次の日、鴻上に感謝しようと思っていたが、

「晴花さんと、どこまでいったの？」

「今どのあたりなんだ？ 友達以上？ 恋人未満？」

クラスの誰もが間違った解釈をしているので、逆に怒りがこみ上げてきた。

全員に説明するのも面倒なので、結局「友達以上恋人未満の関係」で事態を収束させた。

晴花がやってくるたびに、ささやく声がするのは、気のせいにしておこう。そうしよう。

気がつけば、髪型は本当に長いままにしている。

「私、すごく居づらいんだけど……アウェイ？」

「2か月前からアウェイだろ。……今はもうそれだけじゃ済まないけどな。たまには、俺の方から行くから、頼むから誤解されるようなことだけは勘弁してくれ」

「ま、誤解されてもいいんじゃない？」

「血を大量に失ったせいかな、確かにどうでもいいと思いはじめたよ」

「とりあえず、やくもくんには、感謝しないとだね」

……やくも？ 俺は、鴻上の名前を教えた覚えはないぞ？ 保健室で俺が気絶しているときにか？

「え、時雨覚えてないの？ やくもくんのこと」

「……入学早々、休んでいたことぐらいしか」

「うん、それはやくもくんが色々してたからで……って、ほんとに覚えてないの！？」

「分かりません、すみません」

「……私じゃなく、やくもくんに謝ってね」

やくもやくもやくもやくもやくも……もやし？

一つも、微塵も覚えていない。人を覚えるのは苦手だが、何も覚えていないことは、初めてだ。

現に、晴花がひどく驚いている。

「やくもくんって、ここでは言えないけど、すごいことしてるって、昔時雨も驚いてたじゃん」

「ここでは言えないすごいこと……だと!？」

このとき気づいたのは、自分が前髪を切り忘れていることだった。
(そっちかい！)

(4) 目の前が真っ黒でも真っ白でもなく真っ灰だったら、微妙な気持ちにな
この作品を読んでくれた人が、もしその気になったら、
感想でも書いていってください。

いえ、感想お願いします。

(5) 鼠色と灰色の違いを俺に教えてください

六月六日。俺はあのイベントを見事くぐり抜け、土曜のうちに散髪した。あの日は金曜日だったから、今日は週が変わって月曜日ってわけだ。

前髪どころか、後ろも切ったので、ライタまではいかなくとも、髪は短めにした。

……え、あ、うん。自分で切ったさ。普通じゃないって？ いや、普通は自分で切るでしょ。

「そつちじゃなくて、何か文章がいつもの時雨っぽくない」

顔を上げると、すぐ目の前に晴花の顔があり、

「う、うわあつ」

声を上げてしまった。顔上げて声上げる。何か高等なしゃれ？

「やっぱり、時雨じゃないような」

「こ、高校から今までの俺が、梅雨のせいで陰気だっただけさ」

まだ動揺が治まらない。心臓は激しく脈打っている。

「うーん……なんというか……」

晴花が珍しく考え込んでいる。俺、髪切っただけなのに……。そんなに変わったかな？

「まあ、いいんだけど」

まあ、いいんかい！……という突っ込みはあえて心に伏せて、「そんなことより、金曜日に言ってた、鴻上の国家秘密レベルの特殊能力って何なんだ？」

不思議なオーラを醸し出す鴻上のことを聞いてみた。前に、知っているような口ぶりだったから。

「言葉にずいぶんと補正がかかってる気がするんだけど。むしろ、

もつとここでは言えないことになってるじゃん」

確かに。自分で言っておいて「あれ？ おかしいな？」と思った。「私からは言えないよ。やくもくんのこと覚えてたら、言う手間も省けるのに」

「そうか……」

あと、もう一つ。鴻上について気になることがある。それは、

「保健室で、俺が気絶した後に鴻上がどう説明したのか」

「うーん、私あの時寝てたからな」

「どうにも狸寝入りっぽかったんだが」

「どうかな」

嘘か本当か、どっちともとれるそぶりをする。

「普通の説明だったと思うぞ。その説明によって皆が普通の解釈をしたんだと思う」

急にライタが話に混ざってきた。そういえば、ライタの席は俺の席の右斜め前だったつけ。

「というか、お前のすぐ隣にいるんだから、本人に聞けばいいじゃないか」

「のうわあつちよ！」

すぐ右に、鴻上が座っていて、話を黙々と聞いていた。（晴花が言った）今日俺が変だというのも、うなずけるほどの言葉が俺の口から出た。

晴花は、それによって必死に笑いをこらえている。

「面白い声を出すね、幹くん」

鴻上は、高めの声でそう言った。彼の声は時折変わっているのに、いつも鴻上のだと分かるのは、何故なのだろう。

「初めて聞いたな、そんな言葉。もや……何とか、と同じくらいおかしい」

ライタはまだ”もやし”を覚えられないのか。今度きちんと教え込まなければ。

「俺でも、こんな言葉出るとは思わなかったよ」

少し話がそれた。……そうそう、鴻上の説明のことだったな。

「で、お前は金曜日、保健室でどんな説明をしたんだ？」

どっかの取り調べみたいだな、この状況。

「僕は、ただ状況を述べただけだよ。」 幹くんは、僕の話の聞くことよりも、彼女のことの方が大事だった”って”

「おおお……そ、そんな話をしてたの……」

「晴花、ほんとに寝てたのか」

「ま、まあ、最初は起きてただけけど、1分もしないうちに視界がだんだん暗くなって……」

急に晴花が縮こまる。さっきまで笑いを抑えていたのに、それはどこかに飛んだか？

「うんうん。まあ、これを聞いたら、誰もがそういう解釈をするだろう？ 事実なんだから、鴻上の説明は何も誤解を生んではないさ」

ライタはこういう時、頭良いのか悪いのか分からなくなるほど、もつともなことを言う。

彼の成績が分かるほど、まだそんなに仲良くなつてはいないが。

「僕は、確かなことを言つたまでさ。僕だって、説明したくなかつただけ……」

その言葉の後に”こう言つた方が展開が面白くなると思って”なんてのが続いたら、俺は鴻上に全力の突っ込みをいれていただろう。が、現実はその予想通りには行かない、行かないでいてくれるものだ。

「男女が2人きりで話しているところを見てしまったら、間違いくそという解釈に至ると思うんだ」

前言撤回。やはりどう言われてもこちらには不利な条件が揃いつぎている。

彼は、遠くを見据えて目を輝かせている。やはりこの言葉の裏に

は”面白そう”が隠れているのか。

「あの、さつきから言ってる、”そういう解釈”って何？」

晴花、自分で墓穴を掘るな！

それは聞いちゃいけないことだ！

触れたらこっちにも被害が及ぶ恐ろしい爆弾なんだ！

「そういう解釈って言ったら……なあ」

ライタが笑みを浮かべて鴻上を向く。

鴻上もやはり笑みを浮かべて、

「つまりは、君たちが付き合ってるってことさ！」

爆弾投下。地上に落ちるまで5秒間。地上に落ちて爆発。

「……カタクリット語で言ってる？」

晴花がおかしくなった。何語だ、それは。

「つまりは、君たちが付き合ってるってことさ！」

……日本語かい！

「えええええ！？」

……通じたんかい！

「何で？ 何で？ 何でそうなるの？」

晴花がしどろもどろになっている。金曜日は同じようなことを聞いて教室を飛び出してたのに。

俺は、あえて何も言わないでおこう。言ったら、晴花同様、おかしなことを言いそうで怖い。

「いやあ、毎日このクラスに遊びに来るし」

ライタが事実？を言う。

「それはっ！ 昔からのことで……！！！」

「それに、いつも幹くんが付いてるし」

鴻上が事実？を言う。

「……はっ……！」

晴花は顔を真っ赤にする。

「もしかして、自覚なかった？」

鴻上の厳しい一言。許してあげましょうよ、ヤマさん（！？）。
自覚なしでは、罪も与えられせんよ。

……罪は元から無いんですけど。

「君は、黙ったままだね。幹くん、君から何か言いたいことは無いのかい？」

「鴻上、お前はそういうキャラだったのか」

「高校で君と会ってまだ2日もしていないんだ。キャラを確定するには、それなりの期間と、準備が必要だよ」

つまりは、まだキャラが不安定だということか。そういうことだな？

「さあ、君の弁解を言うんだ」

強要ですか。仕方ない。

「俺の弁解？ 鴻上は何か勘違いしてるようだな。俺は一体何の弁解をするって言うんだ？ ありもしない事実には弁解なんてできないじゃないか。そんなのに俺が言うことなんて、あるわけないだろう」
……何とかなかったか？

鴻上は笑ったままだ。その不気味な笑みが、俺を不安にさせる。

「ふっ……君のその言葉自体が、弁解ととれるんだよ」

「しまっ……」

しまった。俺はやつの罠にまんまとはめられたわけだ。

「君の負けだよ、幹くん。おとなしく、事実を認めればいいじゃないか」

……負け？

「そうか、お前はこれを勝負だと。おもしろいことを言うな」

「面白さは君に負けるよ」

「勝ち負け、私情が入り込みやすい言葉だな。例えば俺に何か恨みがあるとか、な」

「……へえ、なかなか良い線いつてるね」

よし、ここまで話を持ち込めた。

俺は実際、弁解などはどうでもよかった（ただ、勘違いだけはされたくなかった）。俺はこの会話の中で、鴻上の秘密を聞き出そうとしている。

相手が勝負事と考えているなら、なおさら手の内を明かすわけにもいかない。俺が話を切り替えられたのも、その一言があったからだ。

もちろん、話す気がないなら、それで終わりだ。

「遠まわしに君は、僕の素性を知りたいと？」

「そういうことだ」

きっぱりと言う。こういう時は、はっきり言っていんだよね？

「話してもいいけど、一つ条件がある」

意外と鴻上は落ち着いている。俺も、さっきよりは落ち着けた。

「条件……？」

しばらく沈黙が続く。

もはやこの戦い（？）の蚊帳の外にいる晴花とライタは、あっけにとられたままだ。

「条件の内容を聞かずに、”はい”とうなずけるかい？」

……強い。……いや、手強い。

条件を聞けない。相手は相当の話術を持っている。

どんな内容でもうなずける覚悟が、俺にあるのか。

逆に、彼はそれほどの秘密を持っているということか。

「内容のヒントだけでも……」

こんなことを言う俺は結構情けない。さっきまでの、真顔の俺はどこ行っただ！？

他の二人のしらつとした顔なんて見てない！ 見てないから！

「僕のことを覚えていれば、その内容は覚えているはずなのに」

じゃあ、俺が鴻上を覚えていれば、こんなに俺が彼の秘密を知ろうとも、正体不明な条件にうなずくこともなかったんだ。つまり、俺の記憶が悪いんだ！

「……分かった。どんな条件でも受け入れる」
結局、これ俺の負けじゃないか？ という疑問は心のたんすの奥底にしまっておく。

「うん、それでこそ幹くんだよ。……放課後、佐久さんと幹くんはあの公園で待っていてくれないかな？」

『あの公園……』

声が晴花と重なる。

公園と言われて浮かぶのは、一つしかない。おそらく晴花も同じ公園のことを考えているだろう。

俺たちの家のすぐそばにある、かわくちとうぶこうえん川口東部公園。

市の南側にあるのに、東部公園。今はそんなことはどうでもいいのだが。

小さいころ、晴花と遊んでいた場所。鴻上も、近くに住んでいるということか？

「分かった。帰りに、そこに行けばいいんだな？」

「ああ。あと、金剛寺くんは来ないようにね」

「オレ、しぐれの家知らないから、道分からん。それに行くつもりもない」

ライタはそういった配慮はちゃんとしているようだ。

一見、何も考えていないように見えて、実は頭脳派なのか（投げ飛ばし事件はさておいて）。

礼儀正しい所も見えるし（投げ飛ばし事件はさておいて!!）。

金剛寺って名字も、どこかの名家のような気もする……。

「とりあえず、2人とも必ず来てね」

「俺は今日予定ないから、大丈夫だ」

「私も特に無いかも」

かも、が気になったが、何も言わないでおいた。

「おっと……もう休み時間終わるね」

鴻上が自分の腕時計を見て言った。俺は教室の時計を見る。午後

一時一分。どうやら一分早く進んでいるらしい。

授業開始の鐘の音は、数秒遅れて校舎に流れた。

「じゃ、時雨、やくもくん、またあとでね」

「うん、また後で」

鴻上は笑顔で晴花に答える。

晴花には効いていないようだが、この笑顔は、他の女子には絶大な効果があるらしい。登校してきて早々に人だかりができたのもその容姿のせいだろう。

今日、朝から登校してきて、彼が背後からきらつとしたオーラを発動した途端、一人女子が気絶した。

俺はどす黒いオーラをくらった記憶があるんですけど。

……まあ、確かに。この3人を比べたら、鴻上が秀でるに違いない。

〃

晴花には、効いていないよな。そうだよな。

何か不安になる。これは好き嫌いの話じゃない、断じて。昔から仲良くしてる友人が簡単にそうなるわけない、というような。

抽象的すぎて、何も伝わらないかもしれないが。

ああ、こんなんじゃ、恋人と思われても仕方ないか……

〃

世界史の授業中、ノートの端に書いた、小さなつぶやき。この文章だけは、誰にも見られないようにしておこう。しかし、この落書きは残しておきたい。

この前、晴花がノートの中身を俺に見られなくなかったのと同じように。

俺だって晴花に見られたくないことが、少しだけある。心に留めておけば、見られてしまうかもしれないから、俺はいつもと違うノートに呟いたのであった。

5時限目が終わり、何事もなくノートを鞆にしまう。ライタには気づかれていない。

「幹くん、授業中に落書きはいけないよ」

……鴻上。お前に気づかれてたか、やっかいな相手だ。

「そう言い切るってことは、お前も授業中によそ見してたわけだ」
「いや？ 僕は授業に集中していたよ。数か月の遅れを取り戻すためにね。ただ何となく君が落書きしてるような気がして、気になつて聞いてみただけなんだけど……。」 お前も”ってことは、やっぱり落書きしてたんだね？」

「うつ……！！」

巧妙な手口に騙された。

俺の言葉の一つ一つに着目して、鴻上は見事に痛い所を突いてきた。

「お前はディベート部でもやったらどうだ？」

「うーん、僕はもう既に違う部活に入っているから、できないよ」

「何部だ？」

「手芸部だよ。確か、佐久さんと同じだったと思うけど」

へえ、と感想を漏らしたが、俺は晴花が手芸部に入っていたことに驚いた。

部活に入ってたのか、あいつ。

「幹くんは何部に？」

「俺か？ 俺は……」

「僕の予想は、書道部だと思っただけど」

……正解。だが言う気にはなれない。

実際、最初の顔合わせ以外、部室に踏み入っていないからだ。俺は俗に言う、“幽霊部員”といったところか。

「俺は帰宅部だ」

「そっなんだ。昔、習字やってたから、てっきり今も続けてるのかと」

「学校ではやってないけど、家では続けてる」

「そっか、続けてるんだね」

鴻上は、やはり俺のことを知っているようだ。今までずっと同じ学校に通ってきてたとか……？

鴻上について、何も思い出せないまま、いつの間にか下校時刻になっていた。

俺ははやる気持ちを抑えて、忘れ物がないか確認してから、鞆を下げて教室を出た。

(5) 鼠色と灰色の違いを俺に教えてください (後書き)

四、五月より、六月はずいぶんと長くなりそうです。

このサイトに不慣れだった、ということもありますが。

おそらく「六月のこと」で、この作品は第一編を終えると思います。

(6) 鉛の空に、晴れ間が見えて

昇降口まで行くと、晴花がいた。俺を待っていたのだろうか。

「時雨、さあ行こうか！」

「どうせ家近くなんだから、わざわざ一緒に帰らなくとも……」

「いざ決戦！ って感じがするじゃん」

「俺たちは、戦いに行くのか」

「え……違うの？」

「話、聞いてましたか？」

「聞いてたつもりなんだけど、ほんとは何なの？」

自分の下駄箱から靴を取って、俺は下足に履き替える。

昇降口の戸を開けると、まだ日は高かったが、灰の空の隙間程度の光では、俺達を明るく照らすことはできない。

特に、色々ありすぎて気落ちしている今の俺には、むしろ雨が降らないと心が晴れない状況にある。

たくさん突っ込む所があつて、そのボケを捌さばいてくれる人が俺以外なくて、しかも当の俺は雨男で前も後ろも真っ暗なやつで（その点は自分で認めている）。

入学早々遠慮なく人目も気にせずやってくる晴花。

入学から1か月で本性をあらわにしたライタ。

2か月経ってやつと通ってきたまともなやつと思つたら、謎が多すぎて不気味な鴻上。

それと後日談でクラスで飼うことになったグッピー。

まあ、最後のグッピーに関しては覚えていない人が大半でしょう、そつでしょう。後付けとか今更いいだろ、とか。お前自身忘れてた、とか。そんなん受け入れますとも。

でも、今までのことを整理する時間がなかったんだ。今このゆつくり帰る道で、日記にも書かずに考えるしかないんだ。

……あれ、これ誰に語ってるんだろ。

「ねえ、何をしに東部公園に行くの？」

我に返ったのはその言葉が俺に投げられた時だった。さつきまで何度も同じことを聞いていたのだろうか、若干晴花の機嫌がよろしくない。

行けば分かる、と言っても納得しないだろうから、

「俺も鴻上が何を考えてるのかわかりません！」

質問の答えを校舎に投げ飛ばした。後ろでガシャンと音が聞こえたのはきつと偶然だろう。

「何か、いつもの時雨に戻ったみたい」

晴花が機嫌を直したようだ、笑っている。

「……？ 俺は何かに変わっても戻ってもいないぞ？」

「やっぱりこっちの時雨の方が面白いなあ」

そう言った晴花がの顔が、いつもよりかわ……ぐはっ。

今、俺おかしいことを言いそうになったなあ。何でだろうなあ。

あははは。

「その微妙な顔が、いつもの時雨なの」

生まれつき微妙な顔なんですか、俺は。いくら幼馴染でも、いつもの”俺を決めつけられたくない……。

俺は釈然としなかったが、そのもやもやは保留にしておいた。後でまとめて吐き出すために。……誰に？

栗毛で短髪の少年は、金剛寺ライタという。

彼は、教室の前の戸、入ってすぐの空き机に載せられた、ハンドボール大の水槽を眺めていた。傍にあった餌を、水槽の魚にあげているようだ。

「そのグッピー、教室で飼ってるの？」

灰がかった黒髪の、鴻上八雲は、その事情を知らないようであった。

「……ああ！ やくも、お前は良いやつだ！」

振り返り、目を輝かせて言うその少年は、まだ小学生のような感性を持つていながら、それなりの知性もわきまえている。

「僕の質問の答えになってないよ？」

「すまない！ つい嬉しくて……。このグッピー、イズマって言うんだけどさ、オレの家族なんだ！」

軽く頭を下げ、再び的外れな答えをする。知性も持ち合わせているはずなのだが。

「う、うん……そうみたいだね」

黒髪の方は、多少ついて行けなかったようだ。

「おっと、質問に答えられてないよな。まあ、この事情を話すには軽く10分程度かかるから、おすすめはしない」

「じゃあ、やめとくよ」

「意外とあっさりなのな！」

三度言うが、金剛寺は知性に満ちているはずなのだ。

しかし、その風貌と振る舞い、話し方からは、なかなかそれを見出せにくい。

「それより、いいのか？」

「いいって？」

「2人とも、もう下校したみたいだけど」

金剛寺は窓の方、つまり昇降口、学校正門の方を見て言う。

「うん、おそらく追いつくし……」

ぼつりと言った一言は、金剛寺には届いていない。

「せっかくだから、金剛寺くんと話そうと思ってるね」

「おう、どんと来い！」

「何で構える……？」

冷めた一言に、金剛寺はとぼとぼと鴻上のもとへ行く。

「金剛寺ってどこかで聞いたことあったなあ、と思ってるね」

「さすがにばれるよな、こんな苗字じゃ」

降参したかのような動きをして、金剛寺は言う。鴻上は、ただ様々な情報を得たいがために遠回しな言い方をする。

「まあ、諸々（もろもろ）のことはあえて言わないとして。そんなお家柄なのに、どうしてこんな公立高校なんかに入ったのか、気になって」

「”なんか”は無いだろ。オレが、唯一勝ち取った自由だからな。今は、こいつらといるのが俺にとつて一番の幸せ、だろうか」

今はいない、幹時雨の席を見ながら言う。

気恥ずかしいことをさらつと言う金剛寺を見ると、聞いた鴻上の方が恥ずかしくなる。

「二人には、言っていないのかい？」

ここで言う、二人とは、言うまでもなくあの二人のことだ。

一瞬難しい顔をしたが、金剛寺は変わらない口調で、

「オレから言う機会は、まず無いだろうな。気づかれたら、そんな時は全てを話す。本当は今すぐにでも正直に話したいんだが、それができない身分なんだね」

「親友に聞かれたら、答えないわけにはいかない。……そういう理屈で、家族を納得させるんだね？」

「ああ、早めに気づいてくれるのを祈るよ。……お前って、最初は遠回りの質問するくせに、許した途端、直球で聞いてくるのな」

「うん、遠慮ないってよく言われるよ」

ふと鴻上が腕時計を見る。話している間に、時間はとうに過ぎていたようだ。

「結構話してたか？」

「そうみたいだね。そろそろ僕は行くよ」

「おう、あんまりあいづらを２人きりにするなよ」

その忠告は、鴻上の本心に気づいて言った言葉なのかどうかは、定かではない。

「分かったよ。あ、それと、僕が君の秘密を知った代わりに」

そう言つて鴻上は金剛寺の前に差し出したのは、何も書かれていない茶封筒だった。中に、紙が三つ折りで数枚入っているようだ。

「これは？」

「これから僕が2人に話に行く内容。あまり人目のつかないところで読んでもらいたい」

「前もって用意してたみたいだな……。ま、おかげで俺の気分はすつきりするかもな」

「じゃ、また明日」

「おう……」

と言いながら金剛寺はさっそく封筒の中の紙を開いてみた。

教室には金剛寺1人。今すぐ読んでくれと言っていたようなものだ。ただからだ。

その内容を数秒見て、金剛寺は少なからず驚愕した。

「鴻上、お前一体なにもの……」

教室の戸を開け、廊下の隅々を見渡すも、既に鴻上の姿は見えなかった。

「2人とも、明日ちゃんと学校来れるといいな。俺は確実に来るけど」

それから5分も経たないうちに、金剛寺は鞆を背負って教室を出た。

「いや、オレ1人じゃなかったから、何か意味深な語りやめて」

気づかれた……。だと!? 金剛寺は私の存在に感じていたのか、振り返って私を見る。

「何か、やくもも気づいてたけど、スルーしたっばいな」

「ばかな、私の存在に気づくなんて……。あなたは何者!？」

「……色んな説明はいいとして。とりあえず、かぎかつこ付けて話そうな」

「私の隠れ蓑に気づくなんて……」

「いちいちそういうの要らないから。それにやくもも気づいてたから。おかげでシリアスな展開が残念なオチになっちまったじゃねえか。あと3回も俺が知的とか言われると逆に傷つくから」

「申し訳ありません……」

「うーんと、謝らなくていいよ。とりあえず君が何者なのか、教えてくれ」

「私は……」

「時雨、またぼーっとしてる」

気づけば俺は、慣れた帰り道を車道に飛び出ることなく歩いている。

無意識のときの、自分の行動に確信を持てない。

「うん、俺は今ぼーっとしている」

「いやぼーっとしてたら反復しないでしょ」

晴花が苦笑いで言う。

「……でははつきり言おう。俺はぼーっとしていてもそれは常人のぼーっととは違う。何より周囲の情報が頭に入ってきている！そしてこの角を曲がると俺達の目的地がある！」

「おお……、すごさが1ミリも感じられないのはなぜ？」

「この場合、ミリでは単位が違うぞ」

「私は”すごさが1ミリも心に届いてきません”って意味で言ったの」

「はあ……」

俺は頭をぺちぺち叩く。

「痛い……」

「そりゃ自分の頭叩いたら痛いでしょ」

「だよなあ……」

俺が言った”痛い”は、もちろん頭を叩いたから言ったのではない。自分より頭が悪い（……と思っている）晴花に155km/hの剛速球をくらったから言った言葉なのだ。

「私に負けて、悔しい？」

「論争では俺が勝ったんだよ」

「はいはい。時雨の勝ちねえ」

くっ、こうなつては俺の方が負け惜しみに聞こえてしまう。

「俺の負けです……」

「訳の分らないこと言うね。ほらほら、東部公園に着いたよ！」
晴花が無理に俺を引っ張り公園へと入れる。

その無邪気な顔に、俺は一瞬心をうば……ぐほおっ。

また変なこと言いそうになったなあ、俺。ははははは。晴花はいつもの俺に戻ったって言うけど、今の俺は変わってるんじゃないかな。

「中学校くらいから、行かなくなっただし、よく見てなかったけど、すべり台とか新しくなってるな」

他にも、新しくなったり、使えなくなった遊具が並んでいる。

「私はよく行くけどな……」

ぼそっと呟いた晴花の言葉が聞き取れなかった。

「え？」

「それよりさっ！ このブランコはずっと変わってないんだよ！」

「ブランコ……」

俺が小学生の時、晴花に謝りに行った、この場所。何が理由で謝りに行ったのかは覚えていないが、子供がゆえに素直に謝れなかったんだ。

「あの時から俺はもやしだったんだな……」

「その言葉、地味に流行らせようとしてるでしょ」

「どうせ、流行らないさ」

自虐的に言うも、流行ることが無いのは「言いづらい」という点ではつきりしている。既にライタと晴花で実証済みだ。どうだ、参ったか、はっはっは……^{むな}空しいな。

「そうだね、空しいだけだよ時雨」

「嫌なタイミングで心を読むんだな、晴花」

「違うよ、勝手に伝わってくるんだよ」

そ、そうだったのかああああ。と言う顔で俺は愕然としてみる。

「あの、そろそろ僕の話をしてもいいかな？」

突然横から割って入ってきた鴻上。

「い、いつの間に!？」

「僕は、角を曲がるあたりから後ろにいたけど……気づかなかった?」

「私は分かったよ、やくもくん」

最近、俺はこの中で一番あほなのではないかと思いつつある。

「えっと、幹くん。事実をさらっと言うから、ちゃんと聞いててね」

「は、はい!」

何故に敬礼をしたんだ、俺？

(7) 雷は落ちませんが、曇りは続くのでした(前書き)

一方その頃的な感じです。

ライタと語り少女の、廊下という微妙な空間で繰り広げられる壮絶な戦い(！？)です。

語りの人が登場人物と話をする、ようなのを書きたかったのですが、なにぶん、ほとんど主人公が語っているのです。

語りさえも登場人物に仕立て上げる俺は、今回も見切り発車で、行き当たりばったりで、ぶっつけ本番で書きます。

(7) 雷は落ちませんが、曇りは続くのでした

「君が何者なのか、教えてくれ」

「私は……」

その時私は迷った。自分の素性をさらすべきか否か。

日下 くさか 月音 つくね。名前にちよつとしたトラウマがある私が、果たして

彼に自己紹介ができるのか……。

「語り聞こえてるぞ、つくねさん」

「はうつつ!!」

私は衝撃を受けた。彼は全て悟っているかのような顔をしている。

「いや、聞こえてるんで」

「はうつつ!!!!」

私は再び衝撃を受けた。彼は何かの学問を大成しているようだ。

「いやいや大成なんてしてないから」

しかし、悟られているといっても、私のトラウマまでは分かるまい。

「何となく”つくね”っていう名前に関連してるんじゃないか、とは思っけど」

「は、ふやああああ!!」

言ってから自分の驚きの言葉に驚いた。

「凶星か。ごめん」

「いいえ、私は名前の漢字自体は気に入っているんです。でも、声に出せば漢字なんて分からないし、自己紹介した後の皆の反応が怖くて……」

とか言いながら私は、自分が卑怯な存在だと、内心自嘲していた。人にそんな事情を話すことで、同情を誘おうとする自分が嫌いだった。

何よりも、気づかれていたものの、今まで彼らの話を立ち聞きしていた私。人の秘密を何くわぬ顔して聞いていた自分こそが、怖ろ

しい存在であるのだ。

「……その語りをオレに聞かせて、何が言いたい」

「あ、声に出していたんですね、私……」

「”やっぱり自分は卑怯者だ”、と」

「……」

「オレが言うことじゃないんだけどさ。自虐って自分で自分をけなすって言うけど、結局は自分がそれほど傷つかないぎりぎりのラインまで自分をけなして、それ以上は相手に言われないようにするっていう、いわば防御線のようなものなんだよね。……オレはな、確かに話を聞かれて気まずかったけど、オレはそうだった以上、聞かれても構わないって思ったんだ」

「……」

「だから、少なくともオレは、話を聞かれたからどうか、言うつもりはない」

「え……？」

「ある意味偶然でもあれば、運命でもある。オレは人との関わり合いを、そういう偶然とか運命で確かめていきたい。そのために、この学校に入ったんだ」

「運命……」

「そう、運命。従うか逆らうかは、人それぞれ違ってるとね」

私は、その言葉に惹かれていた。

運命。漢字で書いてしまえば2文字、たとえばひらがなでも4文字。そんな言葉の組み合わせだけで、私の心に響くものがこの世にあったなんて。

その素晴らしい響きを与えてくれた、私の……。

「あの、金剛寺さん……」

私は一つ頼みをしたみた。

「なに？」

「”殿”と呼んでも、宜しいでしょうか？」

「と、との……？」

「はい、”殿”と呼ばせてください」

「な……何で？」

「私は殿に心を救われたのです。ぜひ、これからは殿に仕え申したいのです」

「許可とる前にもう殿って呼んでるし……」

こうして、私と殿はいつまでも一緒。未来永劫幸せに暮らしま

「暮らしません。てか、殿に仕えるなら暮らしませんよね」

「では、呼び名を”殿方”に……」

「微妙に意味違ってない？」

”殿”って。いや”殿方”って無いだろ……。確かに自分でもすごく恥ずかしいこと言ったな、と思ったけど。

黒の背中まで伸びた髪に……前髪パツンっていうのか？ この髪型は。

背は低め、140cmくらい。その瞳には、マークが見えなくもない。

普通の出会いだったら、オレの好みだった……かもしれない。

「清楚可憐、文武両道が良いよなあ」

「他は分かりませんが、剣道部所属で、中学生の時は県大会優勝しました。私の唯一の自慢です」

謙虚なわりに、自分の長所は隠さない。本当に違う形で会っていたらなあ……。

あれ、今しぐれっぽくないか、オレ？

可愛い女の子につきまとわれるが、自分もまんざらでもない。

ああ、きつとこんな感じでしぐれも日々悩んでいるんだろうな……。

「殿、何かお悩みですか？ 私でよければ相談に……」

「いやむしろ、喜ぶべきなんだろうー！」

「はい！　そうですね！　笑って悩みを飛ばすのです！」

両腕をオレの肩あたりまで必死に伸ばす。頼む、そんなに頑張らないでくれ！

「……えっと、君はどこまでついてくる？」

階段を下りて進んで、もう目の前に下駄箱がある所まで来た。

「君ではなく、つくねです。語りとして、一生殿の物語を語っていく所存であります」

「つまり、家までついてくると」

「はい」

そうですけど何か、みたいな顔をされた。

「き……、つくねさんは自分の家に帰らないのか？」

「はうつつ……！」

そう、やっぱり家の人に言わないと。そして断ってもらわないと。

「安心してください、1人暮らしなので。下宿先を変えるだけのことですから」

不安だああああああああ……！！

どうなっているんだ、これは！？

神様のいたずらにも、ほどつてもんがあるぞ……！！

決めたぞ、もう今度から仏しか信じねえ。もう西洋の行き過ぎたジョークにはついていけねえ。

「あ、殿にはお家問題があるんでしたよね……」

おう、その通りだぜ！

「そう。オレ、家の問題があるし、どうなるか……」

そうして、オレは携帯電話を取り出し、家に電話をかける。

「……今、電話したら、何部屋でも空いてるから、好きに使っていいって……」

半分混沌を交じらせながら、オレは真っ白になって言った。

「いいんですか！？　私のような卑屈で寂しがりで、面倒な人間が行っても！？」

「最初の印象とは、ずいぶんと変わったね、雰囲気」

ああ……、何で出ちゃうんだよ兄さん。このタイミングで何でオレの最大の理解者が電話に出るんだよ……。両親とかだったら、「だめ」で電話がぶつん、なのに。

「これも、運命ってやつか……！」

「はい、運命って素晴らしいですねー！」

そんなに目を輝かせて、オレをこれ以上眩しくさせないでくれ。真っ白になったついでに、オレは引つかかることを思い出した。

「そういえば、やくもはもうあいつらの所に着いたかな」

「やくも……？ ああ、さっきのイケメンさんですね」

「そう、さっきの気障おきなやつ」

同じ人物をさしていても、表現一つで、ほめ言葉にも、皮肉にも変わる。

「あいつらって、そのやくもさんと話していた、二人のことですか？」

「ああ」

「どんな人たちだか、想像がつきません」

「き……つくねさんは何組？」

「四組です。今日、しかも人の少ない放課後に偶然二組を通ったので、他の人たちは全く分からないんですが」

じゃあ、なぜオレ達の名前とか知っていたんだ？ という疑問はさておく。

「まあ、その……殿と呼ぶつくねさんが俺を語るにあたって、二人の存在は外せないよ」

「家臣として、知るべき情報ですねー！」

何だかんだでオレも殿と呼ばれてノリノリだ。

会ったばかりでこんなに懷かれては、慣れざるを得まい。こつこつ、嫌いじゃないし。

昇降口を出て、俺は話し始めた。

「まずは、オレがクラスメイトを吹っ飛ばした話から……」

「いきなりアクションですか!？」

突っ込まれたその拍子に横を見ると、”合唱部 東北大会出場”と書かれた大きな看板が損壊して倒れている。2階の方から掛けてあつて、強く固定されていたはずだが。

「あの時壁壊して弁償したな」

「大丈夫ですか、その生徒は!？」

「オレからも謝りに行つたし、向こうからも謝られた。向こうの両親がしっかりした人で助かつたよ」

「ほんとですね」

話し始めると、なかなか止まらない。つくねさんは、殿、殿と、変な呼び方をするけれど、オレの話をちゃんと聞いてくれた。

2人並んで話していると、感情的なオレでも、落ち着いて話せた。首は下を向きっぱなしで疲れたけど。

ずつと歩いて行つたら、いつも遠いと感じていた家までは、あつという間のことだった。

「もう着いたか。……ここが、オレの住んでる家」

「本当に、ありがとうございます、殿。おかげで殿のことも、他の方々のことも分かりましたし、こうして家に入れてもらうことになつて」

頭をぶんぶん下げる。顔を上げると、つくねさんの髪が乱れていた。その様子がおかしくて、俺はつい笑つてしまった。

「今日初めて会つたけど、初めてじゃないくらい、話したな」

オレは何となく以前どこかで会っている気がした。学校の廊下とかではなく、違う場所で。

「あ!!」

突然、何かを思い出したかのようにつくねさんが叫んだ。

「どうした!？」

彼女は、涙を浮かべながらこちらをゆっくり向いて、

「着替えと教科書類……全部向こうにあるんでした」

そう。今日は月曜日、そして時間帯は夜。

今更帰って取りに行くなんて危ないこと、できません。

しかし、それでも明日の学校はやってきます。

授業の道具が無ければ、大変なことになります。

さあ、オレはこの後どうしたのでしょうか？

答えは、翌日の話をするときにでも。

(7) 雷は落ちませんが、曇りは続くのでした。(後書き)

番外編にしては、あっさりしてて、というか次の話に続くんじゃないかな醸しをいれてしまいました。

翌日になるのは、次の次の次の……

(8) 家に雨は降ってこない

夕暮れの公園は、どんなさびれた遊具もきらきらと輝いて見える。暖かく包んでくれているような夕陽は、さっきまでの沈んだ曇り空を消し去っていた。

幼稚園に入っているくらいの子供たちは、それぞれの母親に見守られながら、砂遊びに熱中している。

そんな中に、高校生三人は四つあるうち三つのブランコを占領して話をしていた。

「いいかい？　これから話すことは、よっぽど親密な人以外に公言してはいけないよ」

「ああ、分かっている。ライタには1ミリも話さないよ」

「この場合、単位が違うと思うよ。あと、金剛寺くんにはもう伝えてあるし」

「二つの意味で、本当か！？」

幹みき 時雨しぐれ。黒髪短髪、ぼさぼさした髪型の彼は、何か秘密のようなものを聞き出そうとしているようだ。

「さっきまで教室にいたから、つい」

鴻上こうがみ 八雲やくも。灰色がかった黒い髪、比較的落ち着いた様子の彼は、”つい”話せるような秘密を話そうとしているようだ。それが秘密というのかは、今は追及しないでおう。

「さっきまで、っってお前の足が速いのか、お前の時間の感覚がずれているのか、どっちだ？」

「やくもくんは小学校の時から足速かったよね」

三人のうちの女子一人、彼女は佐久さく 晴花はるか。若干青っぽい黒髪を、前髪は両側をヘアピンで留めていて、後ろの方は肩のあたりまで伸ばしている。以前までは肩の上でまとめていた髪を、誰かの助言により下ろしたようだ。

「鴻上は、もしかして小中高、俺と同じ学校だったのか！？」

時雨は自分自身に愕然としたような顔をしている。

「時雨ってストレートにものを言って人を傷つけるよね。やくもくんが可哀そうだよ」

「いや、知らなくて当然だよ。だって僕、通信制で通ってたから」
八雲は、本当に哀しそうな顔をしていない。むしろ笑顔を保っている。

時刻は17時28分。子供たちは、母親に呼ばれ、それぞれの家へと帰って行った。

「さて、僕らだけになったし、本題に入ろうか」

「ああ、そうだな」

俺は時間を確認するため、自分の携帯電話を取り出した。

白と銀の、シンプルなデザインの携帯だ。連絡する分に派手な機能は必要ない、という俺の自己主張の一部でもある。

傘の絵が描いてあるメタルプレートを、ストラップとしてこれに付けているのは、決して”雨男万歳”という意味を持っているわけではない。

「五時半か……」

「予定は無いんでしょ？ 時雨」

「まあ、何となく癖で時間見ただけだ」

本当は録画予約し忘れた番組が気になって仕方がなかった。

俺が唯一見ているアニメ番組。

普通という言葉がよく似合う主人公と、病弱すぎる神様のドタバタな話。

特に主人公の声がすごく良い。アニメとは地球と冥王星くらい遠くかけ離れていた俺が、唯一はまった作品で、毎週観ている。

「ああ、『紙耐久の神は』……何とかってやつ？」

「『紙耐久の神はさらさら銀髪だった。』……って、また俺の心を読んだな！？ 晴花」

「だから、急に伝わってくるんだってば。相当気持ちが焦ってるみたいだし」

「くっ、今の俺じゃ、晴花に筒抜けじゃないか……」

「幹くん、そんなに気になるなら、家すぐそこなんだし、録画しに行きなよ」

鴻上はいたって冷静だ。

「しかし、先約を待たせるわけにはいかない……！」

そうだ、いいことを思いついたぞ。

「もし良かったら、時雨の家で話さない？」

「なぜ晴花が俺の家を仕切る！？」

「まあまあ。やくもくん、どうかな？」

「ご家族に迷惑をかけないのだったら、僕はぜひ上がらせていただきたいね」

遠慮という言葉を知らないのかな、二人とも。しかし、今日は両親揃って家にいないし、拒否するのも癪じゃくだったので、二人を家に入れることにした。

「お邪魔します」

「ただいま」

「おい、一人言葉間違えてるぞ」

「え？　じゃあ、ただ……いま？」

なぜか鴻上の方が言葉を訂正した。

「違う、晴花の方が間違ってるんだ」

「だって、私の家」

「じゃないから……！」

と玄関前であれこれ言っていると、

「おかえり、って晴花ちゃんに……えつと？」

大学生の姉が玄関前まで出てきた。

「あ、僕は鴻上です。以前まで、この近くに住んでいた……」

「……ああ！　鴻上八雲くんね！　久しぶりで」

「覚えてもらって良かったですか、嬉しいです」

やはり俺だけが鴻上のことを忘れているらしい。年の離れた姉まで覚えてるのに、同学年の俺が覚えていないなんて。

「へえ、ずいぶん格好よくなっちゃって。モテるでしょ？」

「いえいえ、そんなことは……」

鴻上は手を横に振って、曖昧に否定する。

「謙遜しちゃって」。時雨、リビング空けた方が良い？」

「まあ、できれば……」

俺はリビングであれを予約しなければならぬのだ。

「んじゃ、すぐ出るからそこで待っててね」

「はい」

晴花と姉は話が合うのだろうか、来るたび仲がいい。

〃

この間に、俺の家族を紹介しておこう。

父は基本的に家にはいない。たまに買ってくる土産なんかも、的外れなものばかりで、家族同士の話にもついて行けないことが多い（誕生日に買ってもらった伊達眼鏡が良い例だ）。

眼鏡コレクターで、父の部屋、というかコレクションルームにはたくさん飾ってある。しかし、家族はみな視力が良く、かけてくれる人は、父も含めて一人もいない。そういうわけで、視力が良いのに俺は一週間に一度、眼鏡をかけて登校する。

母も働いていて、会社ではそこそこの位にいるらしい。

父親よりは家族を慮おもんはかってくれて、夕飯の食卓に並んでいることも多い。

両親が喧嘩するときは、大体が眼鏡関連である。俺に眼鏡をかけさせることで両親が喧嘩になったときは、俺が「一週間に二、三回くらいかけるよ」と妥協して、二週間に及ぶ冷戦を終結させた（残念ながら、上記の通り、その条約は俺自身によって破かれている）。

姉の幹 沙世さよは、俺ともども、そんな状況下で育ってきたため、

家事全般は一通りできるようになった。

特に冷戦状態のときは、二人で協力して家事をこなし、解決策を講じ、何度この家を救ってきたことか。

そういった意味では、姉なしではこの家は存在しなかったといっても過言ではない。

……と、日記の中だけでも、姉をここまで誇張して褒め称える俺こそが、家で一番中立的な存在である。

〃

「言い回しが中二くさいよ、時雨」

姉が後ろから突っ込む。既に俺の日記はどんな奴にも筒抜けだったのだ。

「大丈夫だ、俺はもう高一だ」

「結局自分ほめてるし」

「大丈夫だ、それが俺クオリティだからな」

「それより、部屋きれいにしといたから、早く上がって」

そう言うのと、姉は二階への階段を上っていく。

途中、「ごゆつくり」と言ったのは、決まり文句なのだろうか。

「では改めて、お邪魔します」

鴻上が先に家に上がる。

「ただまします」

”ただいま”と”お邪魔します”が混ざった意味不明な言葉を言ったのは、晴花。

リビングは、いわゆるお客さん用としてよく使っている。

そのため、他の部屋より断然きれいに整えられた、一番過ごしやすい部屋になっている。

テレビを点けて、すっかり忘れていたアニメのことを思い出し、チャンネルを合わせると、まだ始まっていないようだった。

「あと六分くらいあるね」

「晴花も観てるのか？」

「暇つぶし程度に」

「晴花は、いつも部活なんじゃないのか？」

「え？ うゝん、たまにしか部活行かないよ。だから今日も帰ってるんじゃない」

確かに、と納得しつつ鴻上にも話を振る。

「鴻上は？ 部活行く方か？」

「行くか行かないかは仕事によるね」

意外なところで例の秘密を聞く態勢に入った。

「それが、鴻上の秘密か」

「うん、表向きはね」

表？ 裏もあるってのか？

「まずは、表の方から教えてもらおうか……」

と言いながら、俺は例の番組の録画予約を済ませておく。

「その前に。このことを聞く代わりに君が受け入れた条件を伝えておこう」

「ああ、そういえば……忘れていた」

「その条件は、君が佐久さんに告白すること、だよ」

「えええええ！？」

晴花は驚き慌てふためいている。

「……えっと、何を告白するって？」

今までの鴻上の言動から、何を告白するのか、何となく分かっている。

認めたくないだけだ。大罪を告白する方がよっぽど気が楽だ。大罪なんて記憶に無いけど。

「分かりきっていることだよ。君が今最初に思ったことをぱつと言えればいい。それから僕の話をしようじゃないか」

「……ちゃんとそれとこれは関係あるんだろうな？」

自分でも顔が赤くなっているということがはっきりと分かる。
「もちろん」

一つため息をつく。そしてちらっと晴花の方を見る。もはや気絶しているとかどうとかはどうでもいい。

「俺はな、晴花のことをだな……」

「は、ひゃい……!」

どうやら、かるうじて気を失っていないようだ。

「す、すき……だらけの人間だと思っていてだな……」

「は、はぁ……」

「要するに、す……きやきが食べたくなくていて」

「うん……?」

「つまり、好きってことだ!」

「………すきやきが?」

変な野次を飛ばす鴻上。おのれ、後でライタのように暴れてやるからな。

「晴花のことをだ!」

「のうわぁっちょ!?!」

はい、言いましたよ。

本当に好きかどうかわからないのに。

その後の沈黙。その後の晴花の言葉。その後の鴻上の秘密。全てが、俺の記憶にしっかりと刻まれる。

(9) 〃もう恋なんてしないなんて〃 (前書き)

久しぶりです、やっと書けました。駆け足で。
またしばらく沈黙(更新休み)が続きます。

(9) もう恋なんてしないなんて

「のうわあっちょ!？」

私はつい、以前時雨が叫んだ言葉をそっくりそのまま叫んでしまった。

「えっ、ちよっ、まっ、えっ？」

言葉が詰まって何も出ない。正確には「え」と「ちよ」と「ま」しかない。

「あ、あの……。もう一回言ってもらうのは？」

「もう二度と同じ言葉は言えない！」

時雨が珍しくおどおどしている。とりあえず、彼のこの言動を都合よく捉えていいのだろうか。

「ほ、本気で、本心で……？」

私はこういう状況に今まで出くわしたことが無いので、どう対処すればいいのかわからない。そんな理由から、私は疑心を持つ。

「本心なら、俺の心から見てみるよ」

「そんな簡単に心は読めないわよ！」

どうしよう、私の顔が真っ赤だ。完全にのぼせている。今にも蒸気が噴き出しそうなくらいに。

「とにかく、答えを！」

時雨は私を見ずに、真横に顔を向けて言う。

「ええと、えと……えと」

どうすればいいのかわからない。どう答えればいいのか……？

「私は何を答えればいいのよ？」

「あれ？　そういえばそうだな……」

「なんというか、君たち二人は、どんなシチュエーションでもこういう空気にするんだね……」

うんうん、と僕は一人で頷く。

「こ、鴻上！……いたつけ？」

「気が動転して、僕の存在まで忘れるなんて。全く幹くんは、なんて残念なキャラなんだ」

僕から言わせてもらうと、第三者が介入しない限り、このじれつたい雰囲気はずっと続くだろう。だから、耐え切れずに横に入るんだよ。

幹くんが気持ちをはっきり伝えられていないのが大半だけど、佐久さんも、この状況に困惑して素直になれていないようだ。まさかこうも計算通りに事が進むなんて、君たちは代表すべきラブコメの要素をきっちり詰め込みすぎだよ。

「残念なキャラって、どういう意味なんだよ？」

「細かいことを気にしてないで、早く何を答えてもらいたいのか、佐久さんに伝えるんだ」

「そんなこと言われても……」

どうやら、本当に分かっていないのだろう。自分の心を見せまいとするあまり、幹くん自身が自分の心を知ることができなくなっている。昔の方が、よっぽど自分に素直だったよ、幹くん。

「もういいよ。僕が幹くんの本心を伝えてあげるから」

「なっ！？ お前も晴花と同じ能力を！？」

持つてないよ。答えるのも面倒なので、僕は話を進める。高らかに、そして厳かに。

「幹くんは、佐久さんと恋人になりたいそうです」

少しだけ、悔しさも込めたかもしれない。あくまで、ほんの少しだけだよ。

「は……？」

「ほわわわ……！？」

幹くんは間の抜けた顔、佐久さんは一気に顔が真っ赤に。むしろ真っ白、かな？

「まあ、僕から見れば、お互いまんざらでもないみたいだし、二人

とも付き合っつてことで事を解決させようか！」

「まんざらでもないって……！？」

「幹くん、分かったね？」

語尾を強めて僕は彼に強制する。僕のキャラは何とか「無茶振り得意」という地点に着地したようだ。

『は、はい……！？』

意外に二人とも素直になった。まあこれで一つ、僕の悩みは解決されたわけで。あのもどかしさは、もう見てられない。

「え、いや、ほんとに？」

晴花はあきらめが悪いようだ。も、もういいだろ。

「そうしとけば、あいつの秘密を聞き出せるし」

「……そう、やっぱりそうだよね」

晴花はどうやらがっかりしているようだ。

「嫌か？」

「んわ？ 全っ然嫌じゃないですとも！ むしろ」

「むしろ嫌か」

「……もう、何で物事をマイナスに考えるのかなあ、時雨は」

晴花が何か呟いたような気がしたが、聞こえなかったのでよく分からないままこの話題は終わった。いや、強制的に終わらせた。既にこっちの神経が限界なので。

「それで？ 鴻上、この事とお前の話はどつつながるって言うんだ？」

俺はやや怒り気味の視線を鴻上に向ける。ここまで恥をかかされたのも、久しぶりな気がする。鴻上が登場してからというもの、俺は彼に意表をつかれ、その勢いに流されているばかりだ。

「うん、おかげさまで僕のモチベーションが格段に上がったよ！」

鴻上は、右手を額に軽く当て、「キリッ」オーラを放っている。

「お前、最初とキャラ変わってないか？」

「不安定だったキャラが、しっかり目標地点で着地したと言ってほしいね」

正直、「うわぁ、めんどくさい」と思ったが、言わないでおいた。お前のモチベーションのために、俺はあんなに頑張ったのかよ…

…」

俺は頭の痛みになんて耐えかねて額をおさえる。相当頭痛がひどいようだ。

「ところでさ、いつになったらお前は話す気になるんだ？」

俺は鴻上ににらみを効かせたつもりだったが、鴻上は笑顔で、

「……何を話すんだっけ？」

と答えたので、俺は呆れてテレビのリモコンを手にとり、電源ボタンを押そうとした。

「ああ、分かった分かった。冗談だからテレビだけは点けないで」

「ほんとだよ」

俺は軽く呟いた。鴻上はほっとした表情をしている。

「うーん、どこから話せばよいのか」

わざとらしい腕組みが、あくまでわざとらしく誇張されている。考え込みながら、一つの答えを見つけたように、指を立てる。

「単刀直入に言うと、僕はね、マルチな仕事をしているんだ」

は？ マルチ？ 仕事？ 高校生の分際でバイト掛け持ちか？

「そんな困惑顔しないで。言い方がまずかったかな？」

俺を馬鹿にしているとしか思えない。何だろ、こいつの反応はいちいち癪に障る。俺は今にも殴りかかりそうな拳を強く抑え込み、鴻上を睨みつけることで我慢する。

「……ごめん。はつきり言うとな、芸能界の人なんだ、僕」

「へえ。……ああああ！？」

俺が驚いているのを見て、鴻上がしたり顔をし、晴花は爆笑している。

「俳優が最初で、他にエッセイとか、歌手とか、アニメの声優とか

……。そうそう、いまやってるアニメの声」

「あ、え、うん、は……………あ!？」

すべてに相槌して、最後の言葉に再び驚愕する。何だって。今放送中のアニメは、俺が録画しているのしか……。

とっさにリモコンの電源ボタンを押す。真っ暗だったテレビ画面が、三色の光によって彩られる。レコーダーの左下に、録画マークである赤いランプがついている。二人の少年少女が並んでいるのが映った。

“俺に、できるのか…………?”

「俺に、できるのか…………?’」

低く、深みのある声。

“できるよ、君なら”

「できるよ、君なら」

高く、透きとおった声。

キャラクターの違った声色が、同一人物からテレビを反復するよう

に発せられる。それも、俺のすぐ後ろから。

紛れもなく、鴻上八雲の口から出た声だった。

「こんな感じ。どうかな、理解してもらった?’」

「…………声優だっけのは分かった。だが二人ともお前がやってたのか!?’」

「うん、エンディングまでちゃんと見てれば確かなことさ」

しばらくして、エンディングロールが流れた。“声の出演”欄に、

「^{くもり}曇 ^{やつか}八束」の名前が対応するキャラクターに振られている。数えれば、実に四つ。

「四人、一役…………」

「そう、その“曇 八束”が僕のタレント名。何となく分かったでしょ?’」

なんてこった。男女の声を分けられるのはどうでもいいとして、

俺の気に入った番組が、よもや鴻上にほぼ占領されていたなんて……。俺は両手で顔を覆い、ひざまずく。

「あれ、驚きのあまりに泣いちゃったの？」

晴花が寄って笑いに來た。

「それは誰だつて驚くよ」。身近にこんな人がいたら」

「違うだろ……。俺が落ち込んだのは、俺の尊厳そのものが一瞬にして打ち砕かれたからだよ……」

俺の話は聞かずに、「くよくよするな」と背中をぽんぽん、と叩く。さっきまでの動揺ぶりはどこ吹く風のように。

「今年からね、僕は留年にならない程度に学校に出席して、芸能活動と掛け持ちしていくつもりだから、たまに会ったときはよろしくね、幹くん」

「幹くん、じゃねえ……」

「……え？」

「俺は、時雨だ。幹は名字で、時雨が名前なんだよ」

「それは、分かってるよ」

「分かってるなら、時雨と呼べ」

「……キヤラ、大丈夫？ やけに不安定だね、今日は」

「あ？ 俺だつて着地態勢に入ってた。お前と同じで、焦点定まつてねえんだ」

「時雨が不良口調になつて……ふふっ」

「佐久くん！ 僕には聞こえていますよ！」

「時雨が急に委員長キヤラ！」

「ち、ちげえよ……。別に、そんなじゃねえし」

「彼、一人劇始めたね」

俺の情緒が安定するまで、しばらくかかったそう。途中から立ち聞きしていた姉が、見かねて二人を家に帰したらしい。全く、抜け目ない。そして、おかしい俺。

そして、俺は翌日長い夢から覚めたように起きた。学校まで走り続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4780w/>

雨男ときどき晴れ

2011年11月26日17時56分発行